

大洲市内遺跡調査報告書Ⅲ

—中世城館跡の調査2—

堀城跡

平地高森城跡

令和7（2025）年3月

愛媛県大洲市教育委員会



堀城跡 俯瞰(北東から)



平地高森城跡 俯瞰(西から)

大洲市内遺跡調査報告書Ⅲ

—中世城館跡の調査2—

堀城跡

平地高森城跡

令和7（2025）年3月

愛媛県大洲市教育委員会

序 文

大洲市は、旧大洲市、喜多郡長浜町・肱川町・河辺村の4市町村が合併してから、本年で20年の節目を迎えました。本市では、木造天守復元から同じく20年を迎えた大洲城や、本市出身の豪商・河内寅次郎こうちとらじろうがつくり出した景勝地にたたずむ臥龍山荘がりゅうさんそうを主軸とした、近世から近代にかけての古建築物の観光活用に取り組んでいます。

一方、本市には先史時代から連綿と人々の営みが続いており、その痕跡として多くの遺跡が残されています。大洲市教育委員会では、こうした多種多様な遺跡の調査を実施してきましたが、令和元(2019)年度からは国庫補助を受けることで、大洲市内を貫く旧街道や中世城館跡の調査などにも着手しており、着実に成果を積み重ねてきています。

本報告書は、中世城館跡2件の調査成果をまとめたものです。今回報告する肱川地区の堀城跡と平野地区の平地高森城跡は、いずれも歴史的文献に記録された城館跡であり、また、各地域の象徴ともいえる遺跡であるため、学術的な調査による実態の解明が期待されていました。本市の歴史や文化的背景の一端を理解し、復元するための基礎的資料として、本報告書を御活用いただきたく思います。

この調査事業を進めるに当たり、御指導御助言を賜りました専門家の方々や関係各位、並びに、調査に御協力をいただいた土地所有者や地元の皆様に対し、厚く御礼を申し上げます。

令和7(2025)年3月

大洲市教育委員会
教育長 櫛部 昭彦

例 言

1. 本書は、大洲市教育委員会が令和元年度～8年度まで実施する大洲市遺跡確認調査事業(国庫補助事業)のうち、令和4年度～5年度までに実施した調査の成果報告書である。
2. 調査事業にあたり、下記の指導を得た。

日和佐 宣正 (考古学、元 愛媛県教育委員会 文化財保護課 主幹)
3. 調査は、下記が担当した。

藏 本 諭 (大洲市教育委員会 文化振興課 主査)
4. 調査および本報告書の作成に関する体制は、序説に記載する。
5. 試掘調査作業については、和泉敏一、井上健士、梅原純一、亀井泰基、横山義之の協力を得た。整理作業については、主に藏本および榊上知恵子(大洲市埋蔵文化財センター 会計年度任用職員)が作業にあたり、井上、横山が一部を補助した。
6. 第2章で表示した座標・標高・方位等は、世界測地系平面直角座標系IV系にしたがった。
7. 土層・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1967)に準拠している。
8. 本書に掲載した地形図は、大洲市農林水産部農林水産課(現 農林振興課)から提供を受けた等高線図(林野庁作成公共測量成果)を基図とした。なお、この等高線図は、林野庁長官の承認を得て複製したものである(承認番号 令和元年7月22日 元林整治第246号)。
9. 第2章に掲載した縄張図は、日和佐宣正氏が作成したものを上記等高線図と合成した。
10. 本書に掲載したトレンチ平面図・断面図等は藏本が作成し、浄書ならびに製図も藏本がおこなった。
11. 本書に掲載した遺物実測図の作成、および浄書と製図は、藏本・榊上がおこなった。
12. 本書で使用した調査時の写真および遺物写真は藏本が撮影した。また、無人航空機を用いた高所写真も藏本が撮影した。
13. 本書の執筆・編集は、岡崎壮一(大洲市教育委員会 文化振興課 専門員)の指示のもと、藏本がおこなった。なお、第2章の一部については、日和佐氏に執筆いただいた。
14. 本書で報告した調査に関わる記録類や出土遺物は、大洲市埋蔵文化財センターおよび肱川歴史民俗資料館で保管している。
15. 調査の遂行にあたり、次の職員から助言、協力を得た。

白石尚寛(大洲市立博物館 副館長)、山田広志(大洲市教育委員会 文化振興課 係長)、
堀本春菜(大洲市教育委員会 文化振興課 会計年度任用職員)

16. 調査の遂行にあたり、次の方々よりご助力・ご指導を賜った(順不同、敬称略)。

柴田圭子(愛媛県埋蔵文化財調査センター)、 首藤久士(愛媛県埋蔵文化財調査センター)、
甲斐未希子(愛媛県歴史文化博物館)、松本 明、平田信行、
春日神社、本願寺、大安寺、大洲市平野コミュニティセンター (旧 大洲市平野公民館)、
愛媛県歴史文化博物館

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

目 次

挿図目次

表目次

写真目次

図版目次

序 説	調査の経緯と経過	1
1.	調査にいたる経緯	1
2.	調査の目的と概要	1
3.	発掘調査・整理作業の体制	2
第1章	大洲市の環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	4
第2章	中世城館跡の調査	9
1.	調査の経緯・目的・経過	9
2.	堀城跡の調査成果	11
3.	平地高森城跡の調査成果	20
4.	まとめ	39

図 版

挿図目次

第1章 大洲市の環境

図1-01 愛媛県大洲市の位置	3
図1-02 調査対象と市内主要遺跡	5

第2章 中世城館跡の調査

図2-01 堀城跡周辺地形図	12
図2-02 堀城跡平面図	13
図2-03 堀城跡1トレンチ平面図・南壁土層断面図	15
図2-04 堀城跡2トレンチ平面図・南壁土層断面図	15
図2-05 堀城跡3トレンチ平面図・南壁土層断面図	17
図2-06 堀城跡3トレンチ出土遺物実測図	17
図2-07 堀城跡4トレンチ平面図・北壁土層断面図	17
図2-08 堀城跡4トレンチ出土遺物実測図	18
図2-09 平地高森城跡周辺地形図	21
図2-10 平地高森城跡縄張図	23
図2-11 平地高森城跡1トレンチ平面図・西壁土層断面図	26
図2-12 平地高森城跡1トレンチSP01～06土層断面図	27
図2-13 平地高森城跡1トレンチ出土遺物実測図	27
図2-14 平地高森城跡2トレンチ平面図・東壁土層断面図	29
図2-15 平地高森城跡3トレンチ平面図・3トレンチ①東壁・南壁断面図	30
図2-16 平地高森城跡3トレンチ②東壁土層断面図	31
図2-17 平地高森城跡3トレンチ②出土遺物実測図	31
図2-18 平地高森城跡 郭I石積立面図	32
図2-19 平地高森城跡4トレンチ平面図・東壁土層断面図	33
図2-20 平地高森城跡5トレンチ平面図・東壁土層断面図	34
図2-21 平地高森城跡5トレンチ出土遺物実測図	35
図2-22 平地高森城跡 郭I採集遺物実測図	35
図2-23 平地高森城跡 郭I造成の模式図	36

表目次

第2章 中世城館跡の調査

表2-01 堀城跡 土器・陶磁器一覧表	19
表2-02 平地高森城跡 土器・陶磁器一覧表	38
表2-03 平地高森城跡 金属製品・鉄関連遺物一覧表	38

写真目次

第1章 大洲市の環境

写真1-01 塚穴古墳 石室内部	6
写真1-02 滝ノ城跡と肱川	6
写真1-03 大洲城跡	7
写真1-04 麟鳳閣(新谷藩陣屋跡)	7

第2章 中世城館跡の調査

写真2-01 試掘調査の様子(堀城跡)	9
写真2-02 縄張図作成の様子(平地高森城跡)	9
写真2-03 大野直之墓石	14
写真2-04 河野牛福(通直)宛行状「柁谷家文書」	22
写真2-05 河野通直感状(五月一日)「柁谷家文書」	22
写真2-06 河野通直感状(三月二一日)「柁谷家文書」	22
写真2-07 一条兼定宛行状「柁谷家文書」	22
写真2-08 梶谷景則墓石(会心地区)	24

図版目次

図版01

1. 堀城跡 郭Ⅱ(北東から)
2. 堀城跡 郭Ⅱ(北から)

図版02

1. 堀城跡 郭Ⅱ 1 トレンチ完掘状況(東から)
2. 堀城跡 郭Ⅱ 1 トレンチ南壁土層(北東から)

図版03

1. 堀城跡 郭Ⅱ 2 トレンチ完掘状況(北東から)
2. 堀城跡 郭Ⅱ 2 トレンチ完掘状況(西から)

図版04

1. 堀城跡 郭Ⅱ 2 トレンチ南壁土層(北東から)
2. 堀城跡 郭Ⅱ 2 トレンチ SP01断面(南西から)
3. 堀城跡 郭Ⅱ 2 トレンチ SP02断面(南西から)

図版05

1. 堀城跡 3 トレンチ南壁土層(北西から)
2. 堀城跡 3 トレンチ完掘状況(北から)

図版06

1. 堀城跡 4 トレンチ完掘状況(東から)
2. 堀城跡 4 トレンチ北壁土層(南東から)

図版07

1. 堀城跡 3 トレンチ出土遺物
2. 堀城跡 4 トレンチ出土遺物

図版08

1. 平地高森城跡 俯瞰(北東上空から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ完掘状況(北東から)

図版09

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ完掘状況(北から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ完掘状況(北西から)

図版10

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ(南)西壁土層
(東から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ(中央)西壁土層
(東から)
3. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ(北)西壁土層
(東から)

図版11

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SK断面(東から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP01断面(東から)
3. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP02断面(南から)
4. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP03断面(東から)
5. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP04断面(西から)
6. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP05断面
(北東から)
7. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP06断面(東から)

図版12

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 2 トレンチ完掘状況(北西から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 2 トレンチ(北)東壁土層
(西から)

図版13

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 2 トレンチ(南)東壁土層
(西から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 2 トレンチ(南)東壁土層
(北西から)

図版14

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3 トレンチ完掘状況(西から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3 トレンチ①(南)東壁土層
(北西から)

図版15

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3 トレンチ②(北)礫検出状況
(南西から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3 トレンチ①(北)
東壁土層(西から)

図版16

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3 トレンチ①(北)
東壁・南壁土層(北西から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3 トレンチ②
石積裏込検出状況(北西から)

図版17

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3 トレンチ②
石積裏込検出状況(西から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3 トレンチ②
東壁土層(北から)

図版18

1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 石積(東から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 切岸(北西から)

図版19

1. 平地高森城跡 堀切Ⅰ 4 トレンチ完掘状況
(北西から)
2. 平地高森城跡 堀切Ⅰ 4 トレンチ①東壁土層
(西から)

図版20

1. 平地高森城跡 堀切Ⅰ 4 トレンチ②
東壁土層(北西から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅵ 石積(南東から)

図版21

1. 平地高森城跡 堀切Ⅱ(南西から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅴ 切岸(西から)

図版22

1. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ完掘状況(南西から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ完掘状況(南から)

図版23

1. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ完掘状況(南東から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ東壁(南西から)

図版24

1. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP01断面
(北東から)
2. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP02鉄滓出土状況
(南西から)
3. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP02断面
(北東から)
4. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP03断面
(北東から)
5. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP04断面
(北東から)
6. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP05,06断面
(北東から)

図版25

1. 平地高森城跡 1 トレンチ出土遺物
2. 平地高森城跡 3 トレンチ出土遺物
3. 平地高森城跡 郭Ⅰ 表面採集遺物
4. 平地高森城跡 5 トレンチ出土遺物

序 説

1. 調査にいたる経緯

令和 7 (2025) 年 3 月現在、大洲市内には142件の埋蔵文化財包蔵地があり、そのうち約 7 割が中世城館跡、約 2 割が弥生時代遺跡となっている。ただし、これまで実際に調査された遺跡の数は、ごくわずかに留まっている。これは、幸いにも市内の新規開発が少なかったことを示す以上に、遺跡の正確な範囲や構造について、長らく把握されてきていなかったことを示しているといえる。この状態が続けば、遺跡の価値や重要性が知られぬまま、新たな開発や自然災害によって遺跡が損傷あるいは滅失することにつながりかねず、文化財を保護するうえで大きな懸念事項となっていた。

さらに、四国八十八箇所霊場を結ぶ遍路道の現

状把握なども課題となっていた。大洲市内に88か所の寺院(霊場もしくは札所)は所在しないが、遍路が利用した道が市内を貫いている。これらの道は、「歴史の道」のひとつとして愛媛県教育委員会主体による調査がおこなわれており、『宇和島街道』(愛媛県歴史の道調査報告書第 6 集、1997)、『八幡浜街道』(愛媛県歴史の道調査報告書第 9 集、2012)の調査報告書が刊行されていた。しかし、試掘調査など考古学的手法を用いた調査はおこなわれておらず、地下遺構の有無や周辺地形の把握などについては、依然課題として残されていた。

以上のような課題に対し、大洲市教育委員会は令和元(2019)年度から国庫補助を受け、市内遺跡の確認調査を実施する運びとなった。(蔵本)

2. 調査の目的と概要

前節のとおり、事業は令和元(2019)年度から開始した。事業主体は大洲市教育委員会であり、実際の発掘調査・整理作業を大洲市教育委員会文化振興課(旧 文化スポーツ課)が担当した。国庫補助を受け、大洲市内遺跡発掘調査等事業として事業を展開し、(1)中世城館跡の調査、(2)弥生時代遺跡の調査、(3)遍路が利用した街道の調査を進めている。

いずれの調査でも、遺跡範囲や遺構の存否を確認したうえで、文化財的な価値づけをおこない、遺跡の適切な保存・保護を図り、そして遺跡の重要性を周知することを目的としている。

(1)中世城館跡の調査では、考古学的手法による調査をほとんど経験していない中世城館跡の試掘調査および縄張図の作成をおこなっている。

(2)弥生時代遺跡の調査では、とくに、研究史上重要性が認識されていながらも、遺跡範囲や遺構の存在が長年不詳であった弥生時代遺跡(村島宮の首遺跡、都谷遺跡)を対象として、試掘調査

および過去の採集資料や寄贈資料の整理をおこなっている。

(3)遍路が利用した街道の調査では、地形測量、試掘調査、沿道に残されている石造物などの実測といった、考古学的手法を中心とした調査を実施し、令和 3 (2021)年度に完了した。

本書は、このうち(1)中世城館跡の調査による「堀城跡」および「平地高森城跡」の調査成果を報告する。中世城館跡調査の年度ごとの事業概要については、以下のとおりである。

[令和元(2019)年度]

橘城跡、笹の森城跡、白石城跡を調査。

[令和 2 (2020)年度]

八黒城跡、高尾城跡、猿ヶ滝城跡を調査。

[令和 3 (2021)年度]

汗生城跡を調査し、猿ヶ滝城跡を補足調査。

猿ヶ滝城跡、高尾城跡、白石城跡、八黒城跡、笹の森城跡、橘城跡の調査成果をまとめた『大洲

市内遺跡調査報告書Ⅰ』、刊行。

〔令和4(2022)年度〕

汗生城跡を継続調査し(現在整理中)、堀城跡、菅田城跡を調査。

〔令和5(2023)年度〕

菅田城跡を継続調査し(現在整理中)、平地高森城跡を調査。大洲市田処および喜多山の中世城館

跡について踏査。

〔令和6(2024)年度〕

滝ノ城跡、三好城跡、大洲市平野町に所在する中世城館跡の踏査。

堀城跡、平地高森城跡の調査成果をまとめた本報告書、刊行。(蔵本)

3. 発掘調査・整理作業の体制

堀城跡および平地高森城跡の調査における、大洲市教育委員会の発掘調査および整理作業の体制は、以下のとおりである。

令和4(2022)年度

〔大洲市教育委員会〕

教 育 長 東 山 宏
(~令和5年2月28日)

教 育 長 櫛 部 昭 彦
(令和5年3月1日~)

教育部長 城 戸 弘 一

〔大洲市教育委員会 文化スポーツ課〕

課 長 脇 坂 剛
課長補佐 大 津 宝 丈
専 門 員 白 石 尚 寛(日本史)
専 門 員 岡 崎 壮 一(考古学)
学 芸 員 藏 本 諭(考古学)

〔大洲市埋蔵文化財センター〕

嘱 託 梶 上 知 恵 子

〔大洲市埋蔵文化財センター〕

会計年度任用職員 梶 上 知 恵 子

令和6(2024)年度

〔大洲市教育委員会〕

教 育 長 櫛 部 昭 彦
教育部長 村 上 司

〔大洲市教育委員会 文化振興課〕

課 長 信 尾 肇 典
課長補佐 菊 地 順 子
専 門 員 岡 崎 壮 一(考古学)
係 長 山 田 広 志(日本史)
主 査 藏 本 諭(考古学)

〔大洲市埋蔵文化財センター〕

会計年度任用職員 梶 上 知 恵 子

以上の体制のもと、実際の発掘調査は蔵本が担当した。整理作業については蔵本、梶上が担当した。(蔵本)

令和5(2023)年度

〔大洲市教育委員会〕

教 育 長 櫛 部 昭 彦
教育部長 城 戸 弘 一

〔大洲市教育委員会 文化スポーツ課〕

課 長 脇 坂 剛
課長補佐 大 津 宝 丈
専 門 員 岡 崎 壮 一(考古学)
係 長 山 田 広 志(日本史)
学 芸 員 藏 本 諭(考古学)

第1章 大洲市の環境

1. 地理的環境

愛媛県は、その東部と島嶼部とを東予、中部を
中予、西南部を南予と呼び、大きく3地域に区分
されている。このうち大洲市は南予に属し、県庁
所在地である松山市から、直線距離で西南に約
50 kmにある。東は喜多郡内子町、西は八幡浜市、
北は伊予市、南は西予市に接する。平成 17 (2005)
年 1 月 11 日に、(旧) 大洲市、喜多郡長浜町、肱
川町、河辺村が合併し、現在の市域が形成された。

大洲市は、市域の中心を一級河川である肱川と、
その支流である河辺川、矢落川などが流れ、流域
に沿って田畑や集落、市街地が形成されている。
市域面積 432.12 km²のうち、70.6% は森林で構成
されており、豊かな農林業地域を形成している。
中央部は大洲盆地が開き、盆地の周囲は高山寺山
(標高 561.2m) や神南山(標高 710.4m)、妙見山
(標高 535.3m) などの山塊に囲繞される。西部は
伊予灘に面し、東部は四国山地に接し、内子町と
の境界にある雨乞山(標高 1213.3m) が市内では
最高所である。

大洲市は、こうした山海に囲まれるため、東西
方向で気候が大きく異なる。海に接する西部は典
型的な瀬戸内海式気候であり、温暖少雨な気候と
なっている。中央部は内陸性盆地型気候に属して
いるため、昼夜の温度変化の差が大きい。また、
夏は高温多湿になり、秋から冬にかけては霧や靄
が発生し、日照時間が短いという特徴がある。東
部の山間部は内陸性気候に属し、寒暖の差が著し
い。

大洲盆地を蛇行しながら流れる肱川は、愛媛県
下では最長であり、幹川流路延長 103 km、流域面
積 1,210 km²を測る。大洲盆地は肱川の氾濫原であ
り、近年では平成 30 年 7 月豪雨によって大規模
な浸水被害を受けるなど、河川整備が進んでもな
お水害の常襲地として知られる。これは、瀬戸内
海に注ぐ河川としては、肱川の河床勾配が非常に
緩やかであること、盆地から河口に向かうほど狭

隘な谷が形成され、平野の広がりが少ない先行河
川であること、盆地に支流が集中することなどに
起因する。そのため、集落は盆地底よりも盆地縁
辺部の河岸段丘上に形成される傾向が強い。

大洲地域は、中央構造線と御荷鉾構造線とに
挟まれた三波川帯(三波川変成コンプレックス)
と、御荷鉾構造線と仏像構造線とに挟まれた秩父
帯(秩父累帯北帯の付加コンプレックス)との両
方にまたがっている。前者は、白亜紀に低温高压
型変成作用によって生じた変成岩類が主体であ
り、後者は、前期ジュラ紀に形成された泥質混在
岩および泥岩が主体となる〔坂野・水野・宮崎
2010〕。(蔵本)

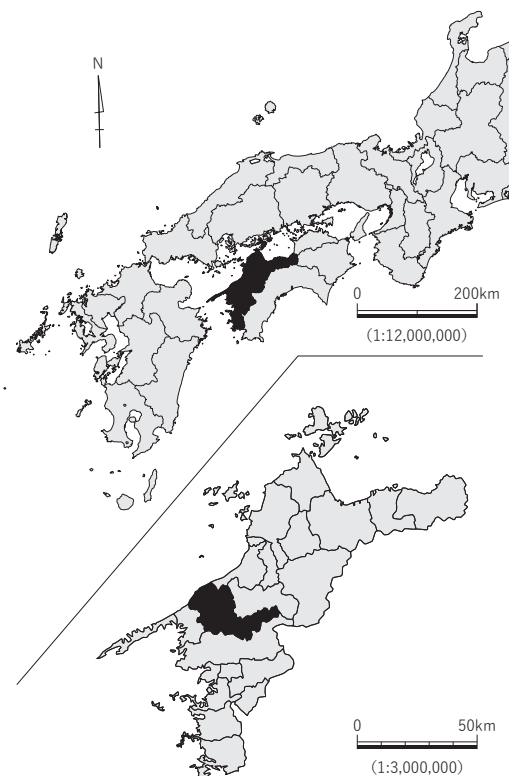


図1-01 愛媛県大洲市の位置

2. 歴史的環境

旧石器時代 低丘陵地^{かみすがい}の上須戒地区で、旧石器時代にさかのぼると考えられる石器が数点採集されている。また、肱川中流域右岸の長瀬遺跡では、角錐状石器が採集されている。今のところ市内で確認されている旧石器資料はわずかだが、肱川流域で主要石材となる赤色珪質岩は、神南山とその周辺で産出することが知られている。このため、近年では石材や集団の移動についても言及されるようになってきた。

縄文時代 新谷地区^{たごう}の田合遺跡で縄文時代早期の押型文土器が出土するほか、石鏃、トロトロ石器などの石器も出土している。また、柚木遺跡^{ゆのき}では新富士橋架橋工事の際、河床面下13～15mで押型文土器が出土したとされる。前期～中期の遺物は、今のところ確実な出土例がない。後期は、田合遺跡、慶雲寺遺跡などで沈線文土器片が採集されているほか、常森遺跡^{つねもり}では磨製石斧が出土したとされる。晩期については、慶雲寺遺跡で沈線を施した深鉢が採集されている。

また、山間部に位置する馬場ノナル遺跡、長瀬遺跡では、サヌカイト、姫島産黒曜石、チャートなどの石鏃や剥片などが採集されている。これら資料は、これまで縄文時代前期と評価されてきたが、時期の判明する土器が採集されておらず、詳細は不明である。また、肱川支流の河辺川沿いでは、山鳥坂ダム建設工事に伴う試掘調査によって岩谷岩陰遺跡^{いわや}の存在が明らかになっており、ここでは縄文時代後期の厚手無文土器数点と赤色珪質岩剥片とが出土している。

弥生時代 市内の弥生時代遺跡は、大洲盆地の縁辺部に形成される傾向にあり、盆地底部は少ない。これは、肱川による度重なる氾濫が要因のひとつと考えられる。十夜ヶ橋遺跡^{とよがはし}などは氾濫原中央に位置し、試掘調査によって弥生土器が出土しているものの、これまで遺構は発見されていない。

前期の資料は限られるが、慶雲寺遺跡で遠賀川式土器の壺、甕が採集されている。ただし、こうした北部九州的な資料の流入は例外的であり、定

着はしない。高速道路建設に伴って調査された底なし田遺跡^{そこ}では、包含層ではあるものの、まとまった資料が出土している。土器は前期末から中期初頭に比定されるものが大半で、南予から土佐にかけて分布する地域色の強い「西南四国型甕」も多数出土している。遺構に伴わない包含層出土資料だが、南予における基準資料のひとつとなっている。

中期になると、全体的に遺跡の数が増加する。山腹や高台に形成されるものが多く、麓からの比高差はおおよそ100m以内におさまる。元城跡^{もとじょう}、中山東遺跡^{おおまた}、大叉遺跡^{みやこだに}などが該当し、都谷遺跡や石斧生産で知られる村島宮の首遺跡も当てはまる。元城跡や田合遺跡では、瀬戸内海沿岸部を中心に分布する凹線文土器が出土し、大叉遺跡では東九州の影響を受けたと考えられる重弧文の壺が出土するなど、さまざまな地域との交流・交易を示唆する資料も出土している。

後期は遺跡数が減少に転ずる。田合遺跡や中山東遺跡などで土器が採集されているが、中期ほどの量ではない。

大洲盆地以外では、肱川河口部右岸の山腹で、弥生土器数点を発見したという新聞記事が残る（昭和18(1943)年）。ただし、現在までにこの採集資料は伝えられず、実態は不明である。

古墳時代 古墳時代の集落遺跡は、今のところ発見されていない。矢落川遺跡で須恵器片や土師器片が出土したとの報告もあるが、出土状況など詳細は不明である。

大洲市内で現在までに確認されている古墳は、久米地区の阿蔵古墳^{あぞう}1基、新谷地区の田合古墳^{にいや}2基（1号墳、2号墳）、塚穴古墳1基の合計4基であり、出土遺物や石室形態から、いずれも古墳時代後期に属すると考えられる。

大正8(1919)年に調査された阿蔵古墳では、須恵器のほか、鉄剣や金環などが出土している。田合1号墳は、直径約10mの円墳で墳丘を周溝が圍繞する。内部主体は両袖式の横穴式石室であり、調査時には下半部のみ残されていた。石室内の出

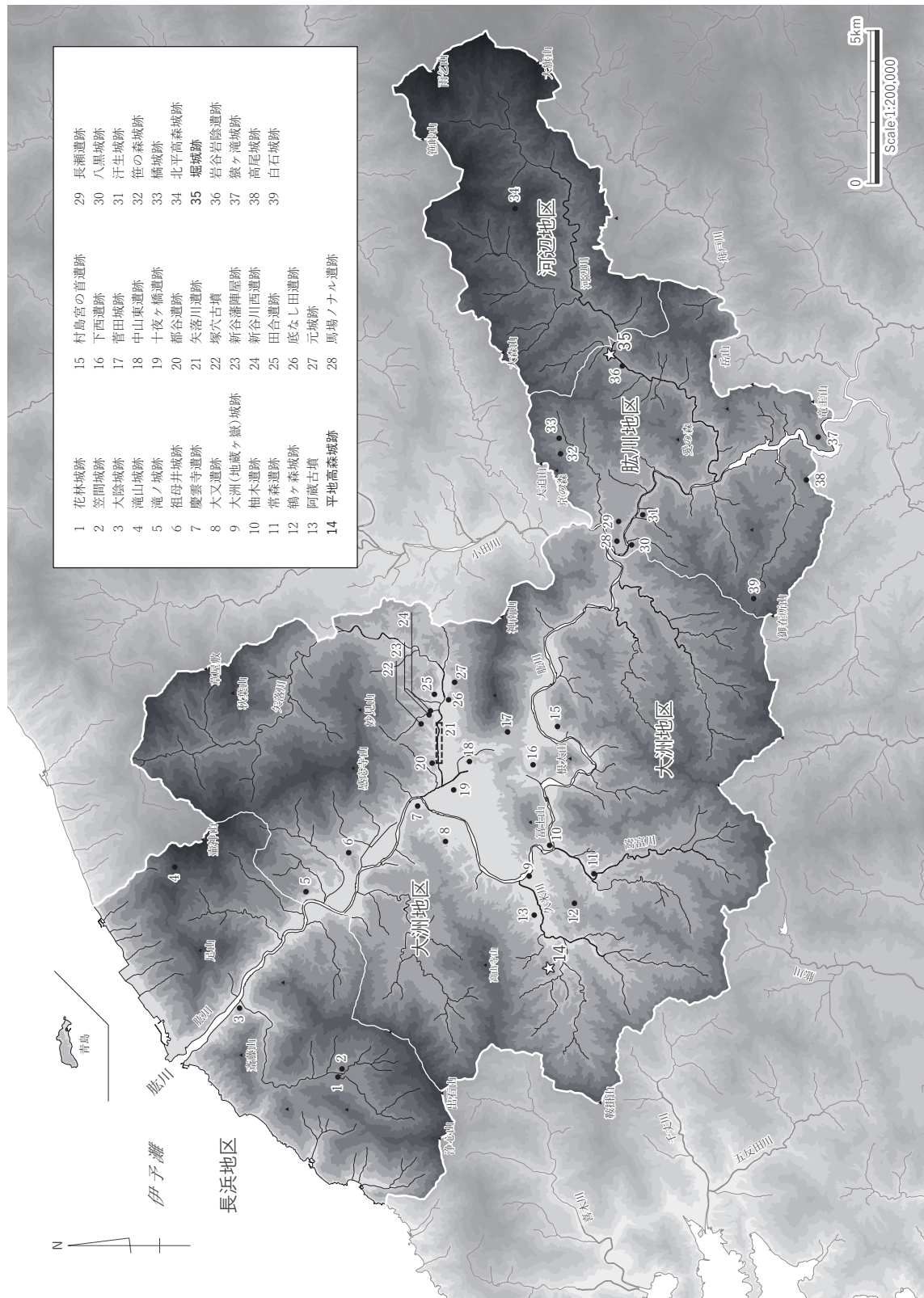


図 1-02 調査対象と市内主要遺跡

土遺物は須恵器提瓶・横瓶・短頸壺・坏・蓋、土師器甕、鉄製刀子・耳環などで、時期は6世紀後半に位置付けられている。墳形は不明だが、2号墳も部分的に掘削されており、こちらも両袖式の横穴式石室と考えられる。塚穴古墳は、大洲市内で現存する唯一の古墳である(大洲市指定史跡)。墳径約10mの円墳で、内部主体は横穴式石室である。出土遺物は今のところ確認されていない。

古代 大宝律令による国郡里制の制定を受け(大宝元(701)年)、伊予国南部に宇和郡が設置される。貞観8(866)年には、組織再編によって宇和郡の北部が分立し、喜多郡が成立した。喜多郡は、矢野郷、久米郷、新屋郷の3郷からなり、このうち久米郷と新屋郷とが、おおむね現在の大洲市域に相当する。

『扶桑略記』には、承平4(934)年、藤原純友の乱に乗じた海賊が、喜多郡の不動穀(公的な貯蔵米)3千石あまりを奪取したという記録も残る。

大洲地域における古代の考古学的資料は少ない。ただし、大叉遺跡と新谷川西遺跡とでは、緑釉陶器、赤色塗彩土師器、暗文入り土師器などが出土しており、官衙のような公的施設が付近に存在した可能性を示唆している。

中世 承久3(1221)年の承久の乱前後に、宇都宮氏が伊予国守護として任官する。宇都宮氏は、代々伊予国守護のほか喜多郡地頭職を与えられており、喜多郡は宇都宮氏の一族の所領であった。元弘3(1333)年の鎌倉幕府崩壊の際には、喜多郡地頭であった宇都宮貞泰の代官などが反幕勢力

と激しく戦ったものの、結果的に宇都宮氏は元弘の乱によって守護の地位を追われている。しかし、宇都宮氏一族は、喜多郡地頭としての勢力は残しつつ、室町、戦国期には有力な国人領主となった。宇都宮氏の居城は、地蔵ヶ嶽城(のちの大洲城)とされる。

戦国期における喜多郡は、宇都宮氏を中心とする多くの在地領主が存在したほか、喜多郡の北にある河野氏、南にある西園寺氏に挟まれており、緊張の絶えない地域であった。永禄11(1568)年には、喜多郡と宇和郡との境界にあたる鳥坂峠^{とさか}において、河野氏・毛利氏と宇都宮氏・土佐一条氏との間で、「鳥坂合戦」が勃発している。この合戦は、南予としては戦国期最大の衝突として位置付けられている。合戦の背景には、(1)河野氏が宇都宮氏に対して任官妨害をしたこと、(2)南予の国郡境目の小競り合いが複雑に発展したことなどの要因が考えられている。

この合戦に敗退した宇都宮氏と一条氏は衰退することとなり、宇都宮氏の求心力を失った喜多郡は、中小の在地領主が乱立するようになる。そのため、肱川下流域では、河野氏・毛利氏に帰属する領主が現れるようになる。とくに、宇都宮氏に従って下野国から移ってきたとされる津々喜谷氏^{つづきや}は、南北朝時代よりこの地域で活動していた肱川下流域の有力領主である。肱川中流域では、大野氏のように、土佐の長宗我部氏と結び付く領主も現れている。

天正3(1575)年には、長宗我部元親が土佐国



写真1-01 塚穴古墳 石室内部



写真1-02 滝ノ城跡と肱川

を統一し、さらには国境を越えて喜多郡・宇和郡にも侵攻している。とくに宇和郡では、西園寺氏らが一進一退の攻防を続けたものの、三滝城(西予市城川町)が攻略され、御荘(愛南町)や三間(宇和島市)が制圧されるなどしており、結果として西園寺氏は長宗我部氏に服属している。

以上のような争乱を背景に、大洲地域には大小さまざまな城館が築かれている。大洲地域の城館跡は、大半が山城である。こうした山城は、河川沿いや交通の要衝となる地点に集中して立地する傾向にあり、基本的に比高差は200mを超えない。このなかには、地蔵ヶ嶽城、菅田城、祖母井城、滝ノ城、大陰城など、地域支配の拠点となる城もある。一方、標高820mの北平高森城、標高726mの滝山城、標高448mの皿森城などは、周囲から突出して高い地点に築城されているが、これは遠方を見通すことができるという地理的特性を活かし、周辺の警戒や監視の役割を担ったことが想定されている。

このほか中世喜多郡の情勢については、津々喜谷氏の菩提寺である西禅寺に残された『西禅寺文書』(愛媛県指定有形文化財)にみることで、当時の情勢を考察するうえで基礎的な資料となっている。ただし、中世喜多郡について記された史料はまとまっておらず、考古学的資料も限られている。このため、当時の状況を探るには、『大洲秘録』や『大洲舊記』など近世以降に編纂された記録類に依拠せねばならないことが多い。

近世 天正13(1585)年、豊臣秀吉による四国

征伐により、大津城(地藏ヶ嶽城の後身、現在の
大洲城)は小早川隆景が統治する。天正14(1586)年には、伊予国内の城郭整理がおこなわれ、祖母井(祖母井城)、滝之城(滝ノ城)、下須戒(大陰城)の統合などが命じられるなか、大津城は存城となった。以降、戸田勝隆、藤堂高虎、脇坂安治・安元が入城している。なお、大津城の近世城郭化は、藤堂高虎以降におこなわれたと考えられているが、明確な時期を示す史資料が残されておらず、諸説紛々とした状態にある。元和3(1617)年、伯耆国米子藩から加藤貞泰が大津城へ入城すると(6万石)、以降は明治期にいたるまで、大洲藩は加藤家が13代にわたって統治することになる。なお、「大洲」という名称の初出は、万治元(1658)年を待たねばならない。

寛永16(1639)年には、藩内分知のかたちで新谷藩(1万石)が成立している。

考古学的調査は、大洲城跡や新谷藩陣屋跡などでおこなわれている。平成11(1999)年に実施された大洲城天守跡の発掘調査では、天守の建替え痕跡が確認され、新旧2時期にわたる天守の存在が想定されている。また、豊臣秀吉や秀吉直臣の居城で出土例がある菊紋瓦なども発見されており、大洲城が重要な城郭に位置付けられていたと考えられる。このほか大洲城跡では、平成29(2017)年から断続的に石垣保存修理工事が実施されており、絵図に描写のない石垣の存在が明らかになるなど、現在も新たな成果があがっている。新谷藩陣屋跡では、陣屋内の建物礎石を検出し、また、



写真1-03 大洲城跡



写真1-04 麟鳳閣(新谷藩陣屋跡)

評定所や謁見所であった^{りんぼうかく}麟鳳閣(愛媛県指定有形文化財)に関連する石敷遺構を検出するなどの成果がある。(蔵本)

【参考文献】

坂野靖行・水野清秀・宮崎一博 2010『大洲地域の地質』
地域地質研究報告(5万分の1地質図幅、高知(13)
第59号、NI-53-34-7)、独立行政法人 産業技術総合
研究所 地質調査総合センター

第2章 中世城館跡の調査

1. 調査の経緯・目的・経過

(1) 調査までの経緯・調査目的

大洲市は142件の埋蔵文化財包蔵地を抱える。このうち約7割を占めるのが城館跡であり、大小あわせて101件の城館跡が周知の埋蔵文化財包蔵地とされている(令和7年3月現在)。

しかし、大洲城跡などごく一部の城館跡を除いては、郭や堀切などの遺構残存状況が比較的良好なものであっても、調査がおこなわれた実績はほとんどない。愛媛県教育委員会が昭和59～61(1984～1986)年、愛媛県下全域を対象として分布調査を実施しているものの、この際に試掘調査などは実施されておらず、また、縄張図など城館跡の構造がわかるような図面の作成も一部にとどまっていた。このような状況であることから、多くの城館跡が、構造や重要性について周知されぬまま、開発行為や自然災害によって損なわれるおそれがあった。

こうした事態を避けるため、大洲市教育委員会では、市内に残る主要な城館跡の現状を把握することを目的に、令和元(2019)年度から国庫補助事業として調査を実施する運びとなった。

(蔵本)

(2) 調査の方法

調査対象は、近世に編纂された『大洲秘録』『大洲舊記』をはじめとした文献や旧市町誌などに記載のある城館跡、もしくは、大洲市史跡に指定されている城館跡から抽出した。

一連の調査では、(i)縄張図(もしくは平面測量図)作成、(ii)試掘調査、を組み合わせて実施した。

(i)では、調査指導にあたった日和佐宣正氏が主導し、縄張図を作成した(平地高森城跡)。この際の測量には、マップオリエンテーリングコンパスおよび巻尺・コンベックスを使用する従来の縄張図の作成法で実施したが、令和2(2020)年度以降の調査では、大洲市教育委員会で事前に測量した座標を基軸に測量した。なお、城跡の範囲が狭く構造が簡単なものは、調査担当者がトータルステーションを用いて平面測量図を作成した(堀城跡)。これらの図面は、大洲市農林水産部農林水産課(現 農林振興課)より提供を受けた等高線図と合成したうえで出力した。

(ii)では、調査対象に複数のトレンチ(試掘坑)を任意で設け、遺構もしくは遺物の検出、土塁や堀などの構造解明などを目指した。掘削はいずれも人力でおこない、埋め戻しも人力でおこなった。



写真2-01 試掘調査の様子(堀城跡)



写真2-02 縄張図作成の様子(平地高森城跡)

なお、柱穴や土坑については半裁掘削にとどめ、可能な限り遺構の保存に配慮した。

これら試掘調査における測量は、国土調査が完了し、図根点などが実際に利用できる地点については、その成果の交付を受け、世界測地系に基づき測量をおこなった。国土調査等の成果を利用できない地点については、任意の位置に設定した仮設測量点を基準に、トータルステーションを用いて測量した。その後、簡易的なGPS受信機を用いて仮設測量点におおまかな座標を付与し、(i)で作成した図面と合成する手法を採った。試掘調査で求めた標高については、先述のような過去の測量事業(国土調査、道路建設など)の成果が利用できるものは、その数値を引用した。過去の成果が利用困難な環境の場合は、上記のGPS受信機を用いて標高を算出した。この場合の標高については、数値の前に「app.」(approximately)を挿入して区別

し、おおよその標高の理解を助けるようにした。

(蔵本)

(3)調査の経過

堀城跡は、令和4(2022)年10月から調査を開始し、11月に調査を終了した。

平地高森城跡は、令和5(2023)年11月から調査を開始し、翌令和6(2024)年2月に調査を終了した。令和6(2024)年3月4日、11日には、調査指導の日和佐氏とともに縄張図を作成した。

また、堀城跡、平地高森城跡で出土した遺物については、令和6年12月24日、柴田圭子氏(愛媛県埋蔵文化財センター)、首藤久士氏(同)より指導を得た。

なお、試掘調査終了後の整理作業は随時おこなひ、令和7年2月までに完了した。(蔵本)

2. 堀城跡の調査成果

(1) 城館の概要

堀城跡は、肱川支流である河辺川^{かわへ}の下流域左岸にあり、河辺川がΩ字状に穿入蛇行している地点の内部にある。標高552mの山頂に位置する妙見城跡から、北北西に派生した尾根の先端部に城跡は立地するが、ピュートのような孤立丘に近い地形となっており、城跡はこの頂部にある。最高所は標高222mである。河辺川河床からの比高差は、60m以上となる。現在は河辺川の蛇行を短絡する放水路^{さくがやしょうすいろ}（嵯峨谷捷水路、昭和43(1968)年完工）が通されており、尾根からは断ち切られている。この放水路側を除けば、城跡は三方を川に囲まれており、周囲から城跡を望むと、河川中に浮かぶ島のような容貌である。

城跡は丘の頂部を中心に展開し、最高所に主郭である郭Ⅰが据えられ、その下段には郭Ⅰを挟むように郭Ⅱと郭Ⅲとが広がる。なお、城跡の周囲は急峻であり、堅堀などの存在は認められない。

郭Ⅰは、平面形が隅丸方形に近い形状で、南東—北西方向が17.5m、南西—北東方向が18mである。現在、この郭Ⅰほぼ全体を使って、春日神社社殿が建つ。昭和59(1984)～61(1986)年に愛媛県教育委員会が実施した分布調査時には、社殿の裏側(北西側)に、南南西—北北東を軸とする高さ約5mの盛り上がりがあると報告されているが、これは土塁とみられる。しかし、残念ながら現在は失われている。また、春日神社拝殿の前面には、郭Ⅰ(社殿)へ登るための石段と石垣が整備されており、全体的に大きな改変を受けてしまっている。

郭Ⅱは、郭Ⅰの南東側に展開する腰曲輪で、北北東—南南西と北西—南東を半径とするような扇形に近い平面形である。北北東—南南西の長さは32m、北西—南東の長さは27mで、城跡では最大規模の曲輪である。郭Ⅰとの高低差は2.2mである。現在は社務所や本願寺からのびる車道が整備されており、郭Ⅰほどではないが、こちらも改変を受けている。郭Ⅱの北側には、大野直之やその娘のものとされる墓石が置かれている(後述)。

郭Ⅲは、郭Ⅰの北側へ取りつくように設けられた、帯曲輪状の細長い曲輪である。先述の分布調査時の調査票によれば、社殿北側で郭Ⅱと郭Ⅲとの間に切岸とみられる崖が存在し、高低差は約4mと記録されている。現在、両曲輪は緩やかな傾斜で接続されるように造成されており、曲輪の境界が非常に曖昧となっている。郭Ⅲは、おおよそ郭Ⅰに存在した土塁の前面に位置することになるが、築造の意図が判然としない。郭Ⅲの先(北西側)は尾根端にあたり、南西側と北側よりも比較的傾斜が緩やかになっている。このため、北西側から侵攻してきた敵勢力をこの地点に集中させ、郭Ⅰ側から攻撃を浴びせるために設けた平坦部とも考えられるが、郭Ⅰと郭Ⅲとの距離はあまりに至近であり、想像の範囲を超えない。

郭Ⅱの北東側、東側、南南西側には狭隘だが平坦面もしくは緩斜面があり、このうち北東側と南南西側で、曲輪として機能していたかを確認するための調査を実施した。

堀城跡は、主郭(郭Ⅰ)と郭Ⅱを中心とする簡素なつくりの城であるが、自然地形を生かしながら構築された要害となっている。堀城跡の周辺に存在する妙見城跡^{みょうけん}、源氏の尾城跡^{げんじ}、松の窪城跡^{まつくぼ}、家老屋敷^{かうやしき}は、いずれも単郭もしくは2郭程度の簡素なつくりであることから、堀城跡も同様の勢力のなかで築城されたと推測できる。また、比較的小さい主郭に土塁を築き、その背後に広めの曲輪が続くという構造は、堀城跡から北西の山稜^{たちばな}を越え、直線距離にして約3.5kmの地点にある橋城跡(肱川町中居谷)、笹の森城跡(同)と共通している。

ただし、春日神社の造営にともなって全体的に改変を受けており、城が機能していた当時の状態からは大きく変化している。(蔵本)

(2) 文献・伝承・その他特徴

中世に遡る文献で、堀城について直接的に記載されたものは確認されておらず、近世以降の地誌に表れるようになる。近世地誌には、肱川中流域

第2章 中世城館跡の調査
堀城跡

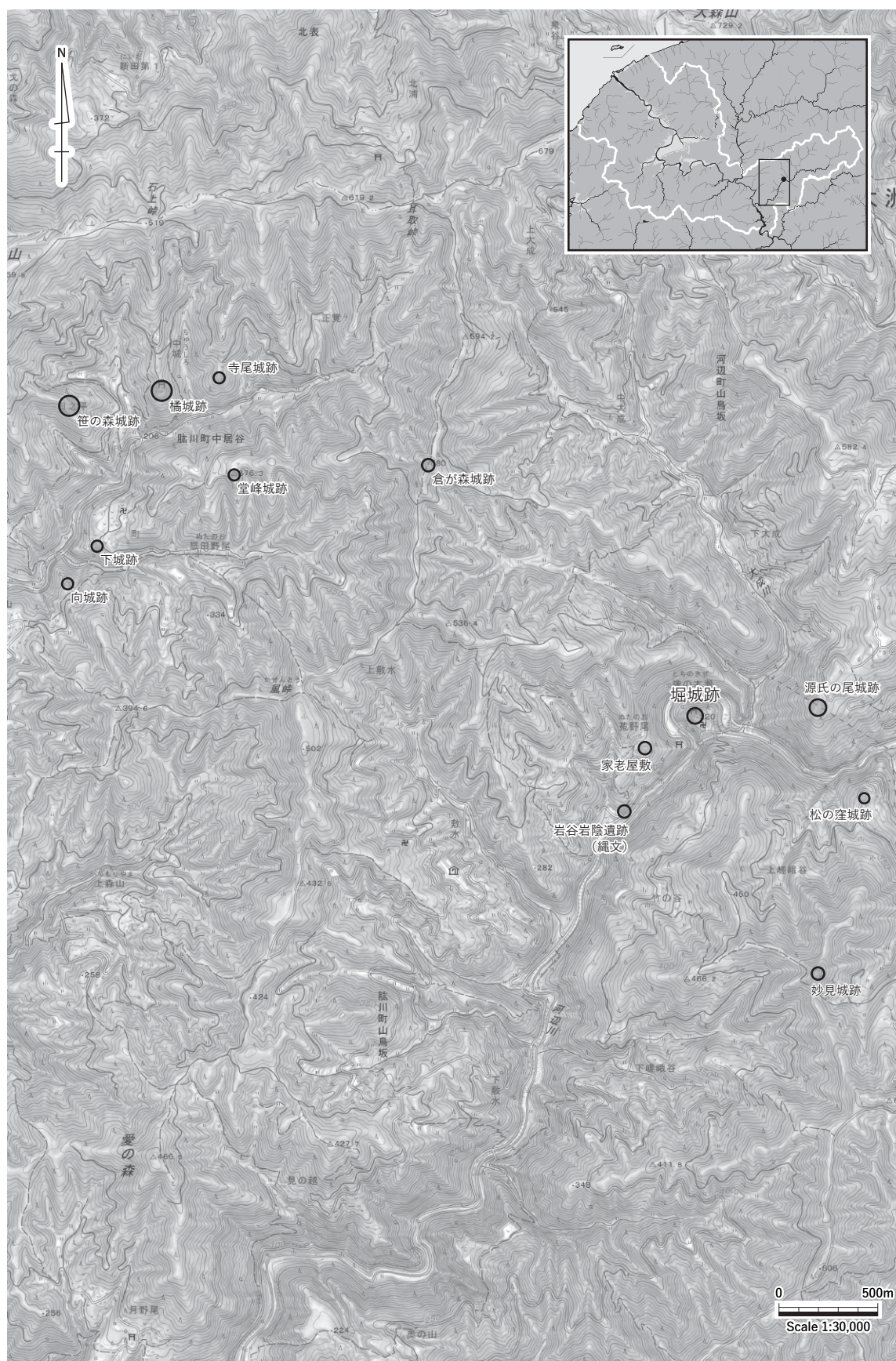


図2-01 堀城跡周辺地形図 ※地理院地図を加工

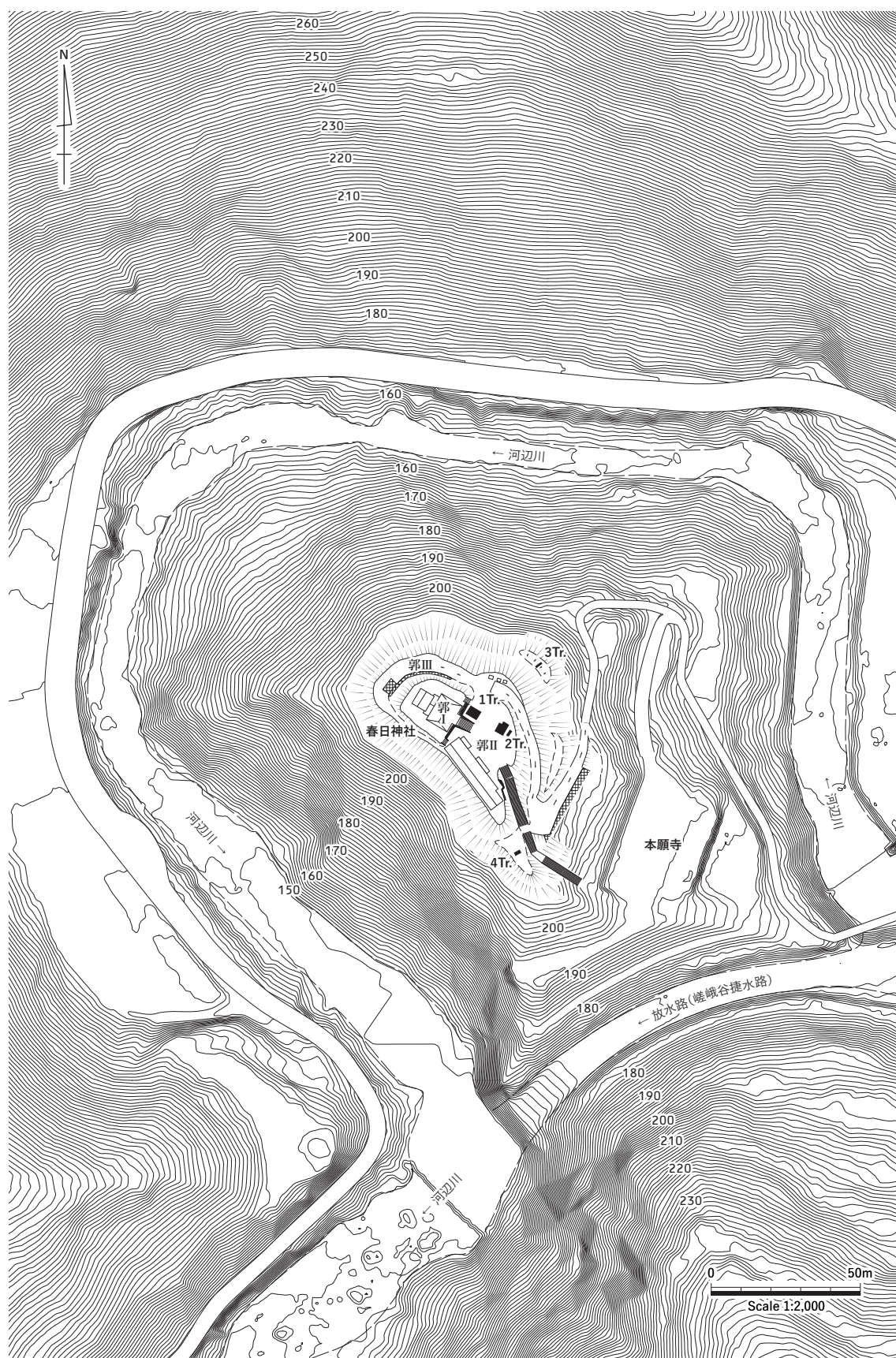


図2-02 堀城跡平面図

に立地する菅田城(大洲市菅田町菅田)や、地蔵ヶ嶽城(のちの大洲城)の城主であり、土佐の長宗我部氏と結んだ大野直之との関連が共通して伝えられる。

『大洲秘録』第五卷(元文5(1740)年以前)では、鳥坂村の項目に「堀之城」として紹介され、菅田直之(大野直之)の番城であったと記されている。また、直之はここで討死したとし、その墓は堀というところにあることが伝えられている。加えて、富永美作守が城番を勤めたとも記されている。

その後に成立した『大洲舊記』第一卷(寛政11(1799)年ごろ)の山鳥坂村の項目には、次のように記される。大野直之は、地蔵ヶ嶽城(のちの大洲城)に籠城し、四国征伐で派兵された小早川隆景と対峙したが、最終的には籠城軍の助命を条件として降伏、自刃したと伝わる(『四国軍記』巻八など)。しかし、実は直之は自刃したように見せかけ、女や雑兵に紛れて堀城にたどり着いたとする。堀城から山稜を隔てて約3.2km北西にある橘城には、直之の兄(もしくは甥)である大野直範がおり、同じ領内であった堀城で直之は匿われたとする。ある日、橘城側から米の貸与を請われたが、直之が土佐に出て不在であったため、直之の重臣である孫右衛門が独断で米の貸与を決めた。帰城した直之は、これを越権行為として孫右衛門を叱責し、手打ちにする。このことを聞いた橘城の直範は、直之の非道を責めて挙兵し、さらに直之の家臣らもこれに呼応し、直之は討伐されたという。直之は堀城跡直下の川成(河成、旧肱川町堀小学

校付近)という地点で、娘とともに討ち取られたとされる。

ただし、『大洲舊記』の編纂者である富永彦三郎も、「色々の説有、實虚知らずして記すこと恐敷思ふといへ共、年経て事は知らず」としており、大野直之の最期については、近世中ごろには、すでに様々な説が流布されていたことがわかる。

なお、直之の墓は川成に、娘の墓は旧岩谷小学校付近に建てられていたが、春日神社境内(堀城跡内)に移設され、現在も丁重に供養されている。

旧肱川町が発行した『新編肱川町誌』(2003年)によれば、16世紀後半は和氣出雲守が堀城の城主であり、和氣氏墓碑によると、天正7(1579)年の長宗我部氏の侵攻によって落命したという。その後の天正13(1585)年に大野直之が入城し、和氣氏は対岸に位置する家老屋敷に移ったとも記している。

現在、城跡には春日神社が造営され、前述のように郭Ⅰに社殿が建つ。旧社格では村社に位置付けられた。また、春日神社の下には本願寺(高野山真言宗)があり、16世紀には春日神社の別当寺となっている。この本願寺では、大野直之や本願寺本尊などを供養するため、毎年8月8日に施餓鬼念仏が執り行われている。

城跡は、昭和49(1974)年3月16日、(旧)肱川町によって史跡に指定されている。(蔵本)

(3) 試掘調査

試掘調査は、郭Ⅱおよび郭Ⅱの北東側と南南西側に存在する平坦面にトレンチ(試掘坑)を設けて実施した。なお、郭Ⅱについては、すでに大きな改変を受けていることが予想されたため、神社などの関係者より過去の状況を聴き取りながら、可能な限り改変の影響が少ないと思われる地点を選んでトレンチを設定した。

1 トレンチ(図2-03) 郭Ⅱにおいて、遺構および遺物の検出を狙って設定した。

1層は現代の真砂土による表土である。2層は土壌化した黒褐色砂質土の薄層であり、堆積厚は



写真2-03 大野直之墓石

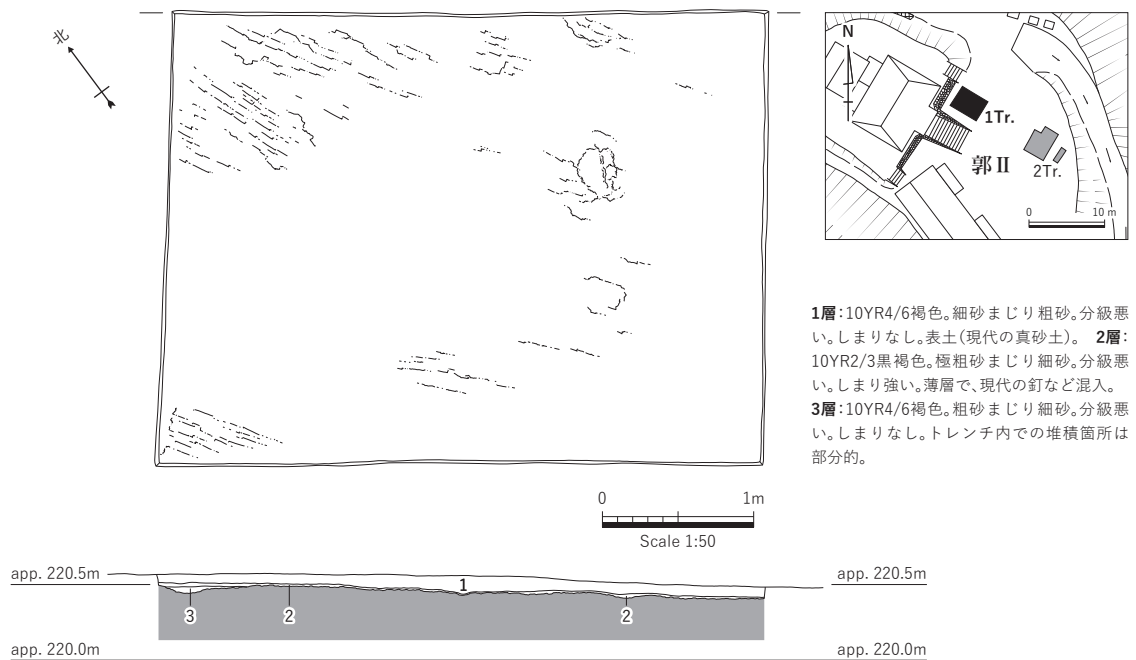


図2-03 堀城跡1トレンチ平面図・南壁土層断面図

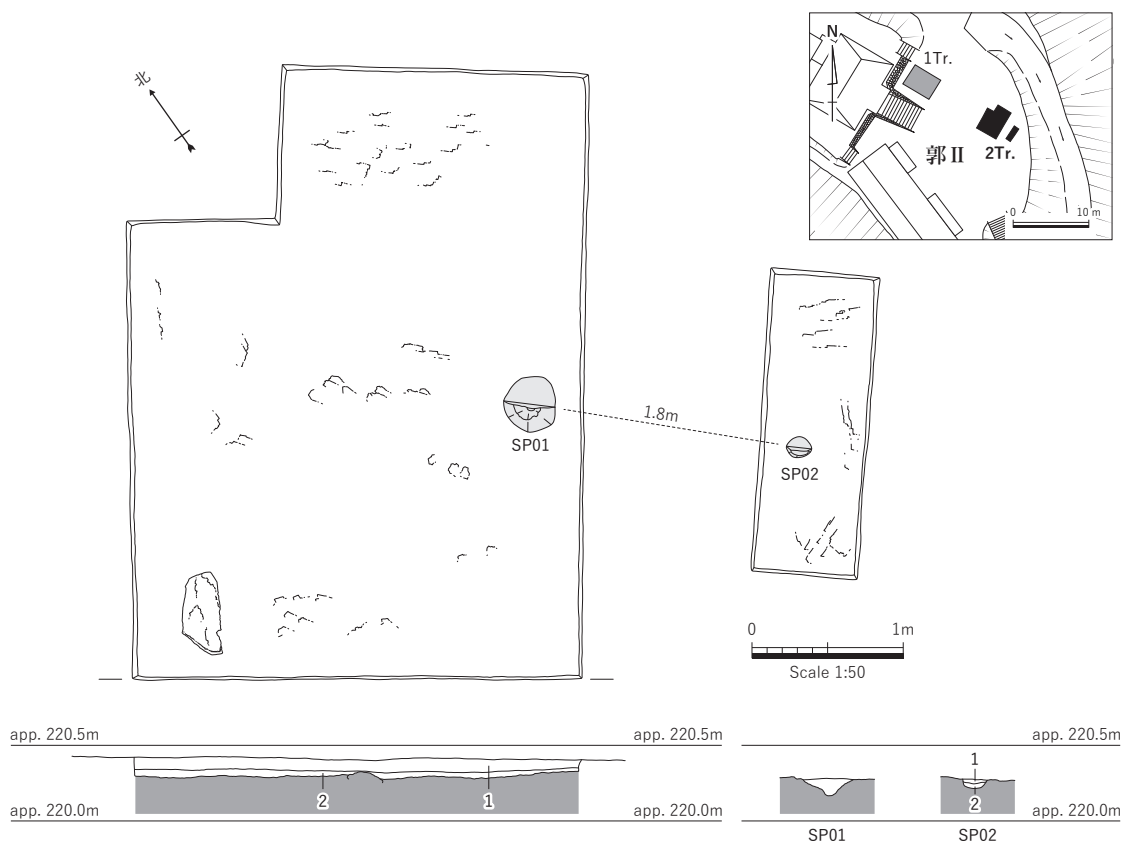


図2-04 堀城跡2トレンチ平面図・南壁土層断面図

2～4 cmである。現代の釘やプラスチック片を含んでおり、旧地表面であったと思われる。3層は褐色砂質土であり、しまりはない。トレンチ内で堆積している箇所は限定的である。地山面は岩盤質で細かい凹凸もあるが、おおよそ平坦である。遺構の検出はなく、遺物の出土もなかった。

2 トレンチ(図2-04) 1 トレンチで遺構などの検出がなかったことを踏まえ、再度遺構の検出を目指し、郭Ⅱの西端部に設定した。なお、掘削で柱穴1基を検出したため、さらに遺構を検出する目的でトレンチの拡張をおこなっている。

1層は現代の真砂土による表土で、1 トレンチ1層と共通する。2層は褐色砂質土で、ガラス片やプラスチック片を含んでおり、現代の層である。地山面は、混入する角礫の影響で細かい凹凸がみられるものの、1 トレンチと同じくおおよそ平坦である。

この地山面を掘り込んだ柱穴を2基検出した。SP01は直径32cmになり、埋土は暗褐色砂質土で分級は良い。1 mm程度の炭化物粒を少量含んでいる。地山面から底までの深さは10cmとなっているが、遺構の大部分は削平を受けているものと思われる。SP02は直径16cmで、SP01のおおよそ半分の大きさである。埋土は上下に分かれ、上層(埋土1)は褐色砂質土で、1 mm程度の炭化物粒の混入が目立つ。下層(埋土2)はしまりの強い黄褐色砂質土で、地山風化物の堆積とみられる。地山から底までの深さは6 cmであり、こちらも遺構の大部分は削平を受けているものと思われる。SP01-SP02間は1.8mだが、周辺で柱穴を確認できなかったため、両者にどのような関係があるかは不明である。1 トレンチを含めた郭Ⅱの地山面の状況から、神社の整備などで全体が大きく削平されていることが強く疑われ、柱穴の遺存状況が悪いのは、こうした理由によるものと思われる。

3 トレンチ(図2-05) 郭Ⅱの北東にある緩斜面が、城の一部として人為的に形成されたかを探る目的で設定した。この緩斜面と郭Ⅱとの高低差は

7 mで、現地表面の法尻から法肩までの傾斜角は約12度となっている。

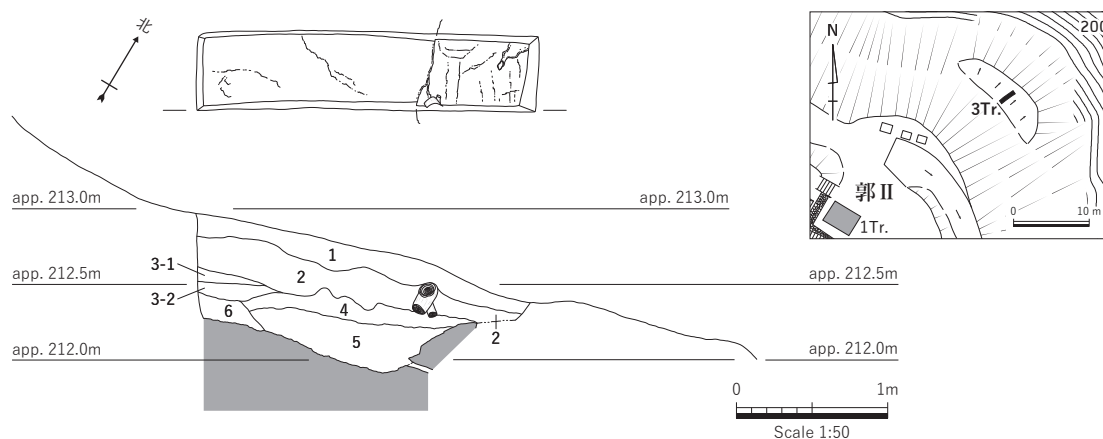
1層は、にぶい黄褐色砂質土の表土である。地表面は腐植土に覆われるが、基本的にトレンチ上部からの崩土が堆積したものとみられる。陶磁器細片が出土している。2層は黄褐色砂質土で、しまりの強い層である。3層は上下2層に細分した。上層の3-1層は黄褐色砂質土で、細礫がまじる。下層の3-2層は明褐色砂質土で、3-1層よりも細礫の混入は少ない。いずれも分級は悪く、しまりが非常に強い。3-2層は水平に近い堆積である。4層は明褐色砂質土でしまりが強い。5層は褐色砂質土で、地山由来の角礫が多量に含まれ、巨礫1石がトレンチの一部を塞ぐような状態である。6層は、にぶい褐色砂質土で、3層と同程度のしまりがある。層の下部ほど分級が良くなる傾向がみられる。地山面は岩盤質で、北東に向けて18度の傾斜をつけている。

3～6層はいずれも固くしまった分級の悪い層で、とくに3層と5層は水平を指向したような層であり、人為的な造成がおこなわれた可能性が高い。ただし、時期を推定できる遺物が3層以下では出土しておらず、城の曲輪として整備されたか、後世の改変によるものかは判断しかねる。

2層では、陶磁器細片8点が出土しており、うち7点は近世以降のものである。図化した01は、青花皿と思われる口縁部片である(図2-06)。内外とも口唇の直下に圈線が1条描かれ、外表面にはさらに文様が描かれているが、細片のため内容は不明である。細片のため観察できる特徴が少なく、判断は難しいが、小野分類による染付皿E群であれば、16世紀中葉～後葉ごろとすることができる〔小野1982〕。

4 トレンチ(図2-07) 郭Ⅱの南側に位置する平坦部に4 トレンチを設定し、この平坦面が曲輪であるかどうかを確認する目的で調査を実施した。この平坦部と郭Ⅱとの高低差は8 mである。

1層は褐色砂質土の表土である。近世以降の陶磁器が3点出土した。2層は褐色砂質土で、しま



1層:10YR4/3にぶい黄褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。表土。 **2層**:10YR5/6黄褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。
3-1層:10YR5/8黄褐色。極粗砂まじり極細砂。分級悪い。しまり堅固。細礫がややまじる。 **3-2層**:7.5YR5/6明褐色。極粗砂まじり極細砂。分級悪い。しまり堅固。3-1層よりも細礫の混入度低い。 **4層**:7.5YR5/6明褐色。極粗砂まじり極細砂。分級悪い。しまり強い。 **5層**:10YR4/6褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強いが崩れやすい。地山碎屑物が多く混入。 **6層**:7.5YR5/4にぶい褐色。極粗砂まじり極細砂。分級悪い。しまりは3層と同じぐらい堅固。層の下部ほど分級は良くなる傾向。

図2-05 堀城跡3トレンチ平面図・南壁土層断面図

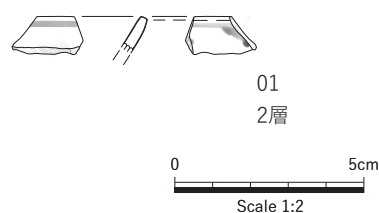
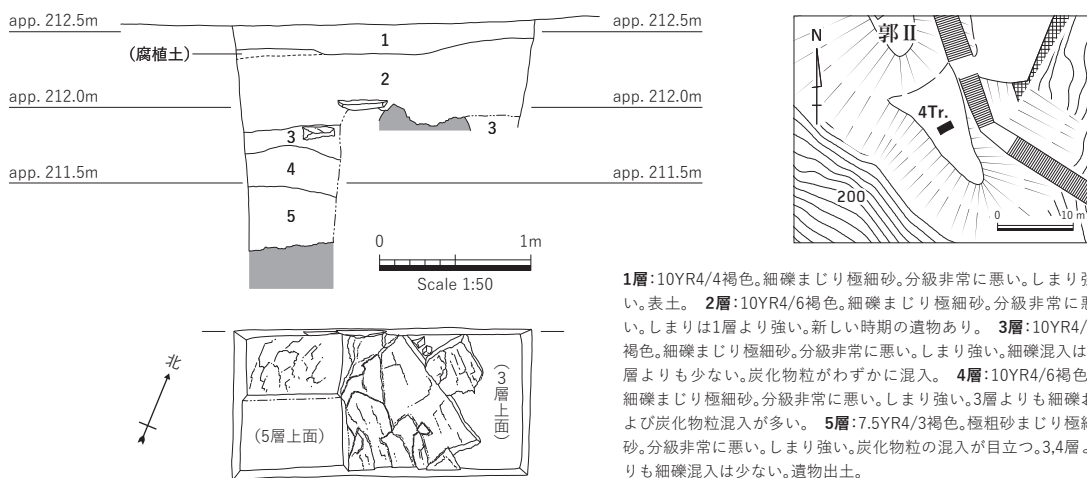


図2-06 堀城跡3トレンチ出土遺物実測図



1層:10YR4/4褐色。細礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまり強い。表土。 **2層**:10YR4/6褐色。細礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまりは1層より強い。新しい時期の遺物あり。 **3層**:10YR4/6褐色。細礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまり強い。細礫混入は2層よりも少ない。炭化物粒がわずかに混入。 **4層**:10YR4/6褐色。細礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまり強い。3層よりも細礫および炭化物粒混入が多い。 **5層**:7.5YR4/3褐色。極粗砂まじり極細砂。分級非常に悪い。しまり強い。炭化物粒の混入が目立つ。3,4層よりも細礫混入は少ない。遺物出土。

図2-07 堀城跡4トレンチ平面図・北壁土層断面図

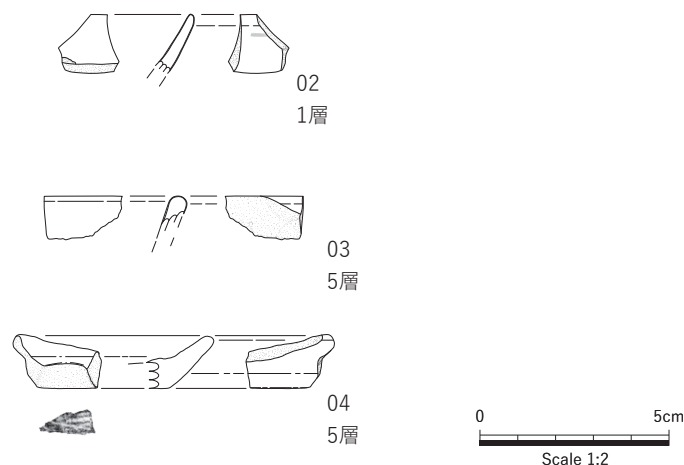


図2-08 堀城跡4トレンチ出土遺物実測図

りが強い。層上部の部分的に腐植土が薄く堆積しており、旧地表面であったと考えられる。堆積厚は40～60cmであり、細礫の混入が目立つ。3層は褐色砂質土で、しまりは強く、炭化物粒がわずかに含まれる。なお、この3層上面でトレンチ平面の約1/2を覆うような巨礫が現れた。除去も困難であったことから、以下の掘削はトレンチ内でも部分的なものとなった。4層は褐色砂質土で、しまりは強く、上の3層よりも炭化物粒が多く含まれる。5層は4層と同じく褐色砂質土で、しまりは強く、炭化物粒の混入が目立つ。この5層では、近世以前の陶磁器が出土している。現地表面から地山面までの深さは145cmである。

1層では、近世以降の陶磁器細片が3点出土し、うち1点を図化した。図化した02は碗とみられ、外面の口唇直下に直線状の文様が施される(図2-08)。5層では近世以前とみられる陶磁器片3点が出土している(図2-08)。うち1点は近世と思われる備前焼の胴部である。図化した03は、直口碗とみられる青磁の口縁部細片である。細片であり、外表面が大きく失われているため、蓮弁などの文様は確認できない。水色に近い釉調から、16世紀ごろの時期を考えたい。04は、土師質土器の皿の底部細片である。底部切り離しは糸切りで、

外表面の一部は灰褐色を呈しており、煤の付着とみられる。

このように、最下層の5層で中世に遡る資料が出土したものの、近世と思われる備前焼片も同時に出土しているため、地山面以上の堆積は近世以降の造成による盛土の可能性が高い。(蔵本)

(4) 試掘調査の成果

試掘調査を4箇所を実施した。このうち、最大の曲輪である郭Ⅱでは2箇所を調査し、2トレンチで柱穴2基を検出した。しかし、全体的に神社造営など後世の影響が著しく、城に伴う明確な遺構を検出することは叶わなかった。

曲輪であるかどうかを確認するために調査した3, 4トレンチでも、残念ながら明快な結果は得られなかった。しかし、3トレンチ2層では16世紀後半とみられる青花皿、4トレンチ最下層(5層)では16世紀ごろとみられる青磁碗が出土している。いずれも近世の陶磁器を伴うため、堆積そのものは近世以降の造成などによるものと考えられる。しかし、従来、城が機能した年代を知る手掛かりは、近世以降に成立した地誌のみであったため、時期の推定が可能な考古資料を得られたのは成果といえる。(蔵本)

表2-01 堀城跡 土器・陶磁器一覧表

番号	出土位置			遺物内容			寸法			色調	特徴	挿図 番号	図版 番号
	郭	トレンチ	層位 遺構	種別	器種	部位	器高 (mm)	口径 (mm)	底径 (mm)				
01	—	3	2層	青花	皿?	口縁	(10)	—	—	胎土:5Y8/2灰白	内外面の口唇直下に圈線1条。外面にはさらに文様あり。	2-06	07-1
02	—	4	1層	染付	碗?	口縁	(16)	—	—	胎土:5Y8/2灰白	近世以降。外面の口唇直下に直線状の文様。	2-08	07-2
03	—	4	5層	青磁	碗?	口縁	(11)	—	—	胎土:7.5Y8/1灰白	直口碗か?	2-08	07-2
04	—	4	5層	土師質土器	皿	底部	(14)	—	—	5YR5/8明赤褐	底部切離しは糸切り。外面一部に煤とみられる灰褐色の変色。	2-08	07-2

※ () 内は残存高もしくは推定値。

3. 平地高森城跡の調査成果

(1) 城館の特徴

平地高森城(以下、高森城)は、大洲城下西側を東流する肱川の支流久米川からさらに分流する沼田川が南麓を開析する山塊の頂部にある。山頂には四等三角点「高森」(基準点標高197.91m)が位置している。

城の構成は、大きな主郭を中心に西側の狭小な尾根に複数の郭を配し、北側の尾根に比較的大きな郭VI等を前後の堀切を配している。

主郭(郭I)は南南西方向を上底とする略台形状の郭で、北北東-南南西軸41.5m、北西-南東軸約33mである。郭VI群に向ける北尾根に対しては堀切1が設けられている。主郭から堀底まで9.5m(試掘調査成果による)で、高い比高を持っている。ただ、堀切に伴う堅堀部分は、東側は城内側0.2m、城外側0.4m、西側は城内側0.5m、城外側0.8mで、いずれも城外側の方が高く、防御面からすれば反対である。その西側には堅堀1と堅堀2が穿たれている。堅堀1は城内側・城外側の深さ0.4m、堅堀2は城内側1.4m、城外側の深さ1.3mである。ただ、堅堀1と堅堀2の城内側には守るべき郭が存在せず、郭IIから郭Vの尾根が続くばかりである。本来の山の傾斜からすれば、北の尾根続きから進攻した場合、東尾根と西尾根側は傾斜がほとんど差はなく、西側にだけ堅堀を穿ったのは意図不明である。なお、郭Iの西側には大規模な崩落痕がある。

主郭の東側尾根続きに対しては、堀切もなく明確な防御線は切岸のみである。南側には堅堀3が設けられているが、主郭Iの東側は比較的急峻な斜面で攻城兵が展開する可能性は余りなく、堅堀3の軍事的効果はほとんどない。

主郭から西側に郭IIから郭Vが展開しているが、それぞれの郭は狭小で不整形で、整地も不十分である。尾根の先端には堀切もない。

主郭の北には別郭のような郭VIと郭VIIが設けられている。中心となる郭VIは南北長軸約38m、東西約16mである。郭VIの南にある郭VIIを掘り切っ

ている堀切2は城内側1.4m、城外側1.8mであり、主郭とは別郭の状況である。郭VIの北には堀切3があり、城内側2.9m、城外側1.3mであり、北の尾根続きに配慮している。

高森城の縄張りを評価すれば、主郭北側斜面の堅堀2条の配置は、内側に守るべき郭が存在せず、意図不明な縄張りである。また、北東尾根に対しては明確な防御線はなく、堅堀3は比較的急峻な切岸が続く主郭東側に続いている。つまり、堅堀を使うという技術は導入していても、その配置理由が理解されていないままの堅堀形状の導入にとどまっていると考えられる。

また、北側尾根に展開する郭VIと郭VIIにしても、郭VIは長軸(南北軸)38mと主郭に匹敵する規模を有しているが、郭VIIと郭VIは主郭Iから51.5mと離れており、鉄砲の実戦的な有効射程と考えられる20～25m(江戸時代の鉄砲足軽の訓練が15間約27m)以上の距離があり、主郭Iの軍事的制約下ではなく、一城別郭と評価できる。なお、郭II～Vはいずれも不整形で整地も不十分で建物を設けられるような状態ではない。主郭北西尾根や郭Vの西続きの尾根に対して、通常設けられるような堀切もない。

以上のことから、平野地域全域を睥睨できる立地にある高森城は平野地域を支配する象徴として、当初は戦闘時の詰の城の機能を期待して郭I～Vまでが築城されたと考えられる。築城後、大規模な侵攻に備えて、十分な駐屯スペースを確保するために郭VI・郭VIIが増築され、稚拙な配置の堅堀群が設けられたものであろう(形態のみを模倣して、軍事的な機能を十分に理解せずに設けられたもの)。その時期は、堅堀の技術はもともと伊予の国ではなく、安芸・備後の毛利勢か土佐の長宗我部勢が持ち込んだものであろう。これだけの改修をする契機となる大きな戦雲が当地方に及んだのは、永禄11(1568)年の鳥坂合戦か、天正13(1585)年の長宗我部勢の大洲地域への侵攻か、それに続く豊臣秀吉の四国攻めくらいであろう。

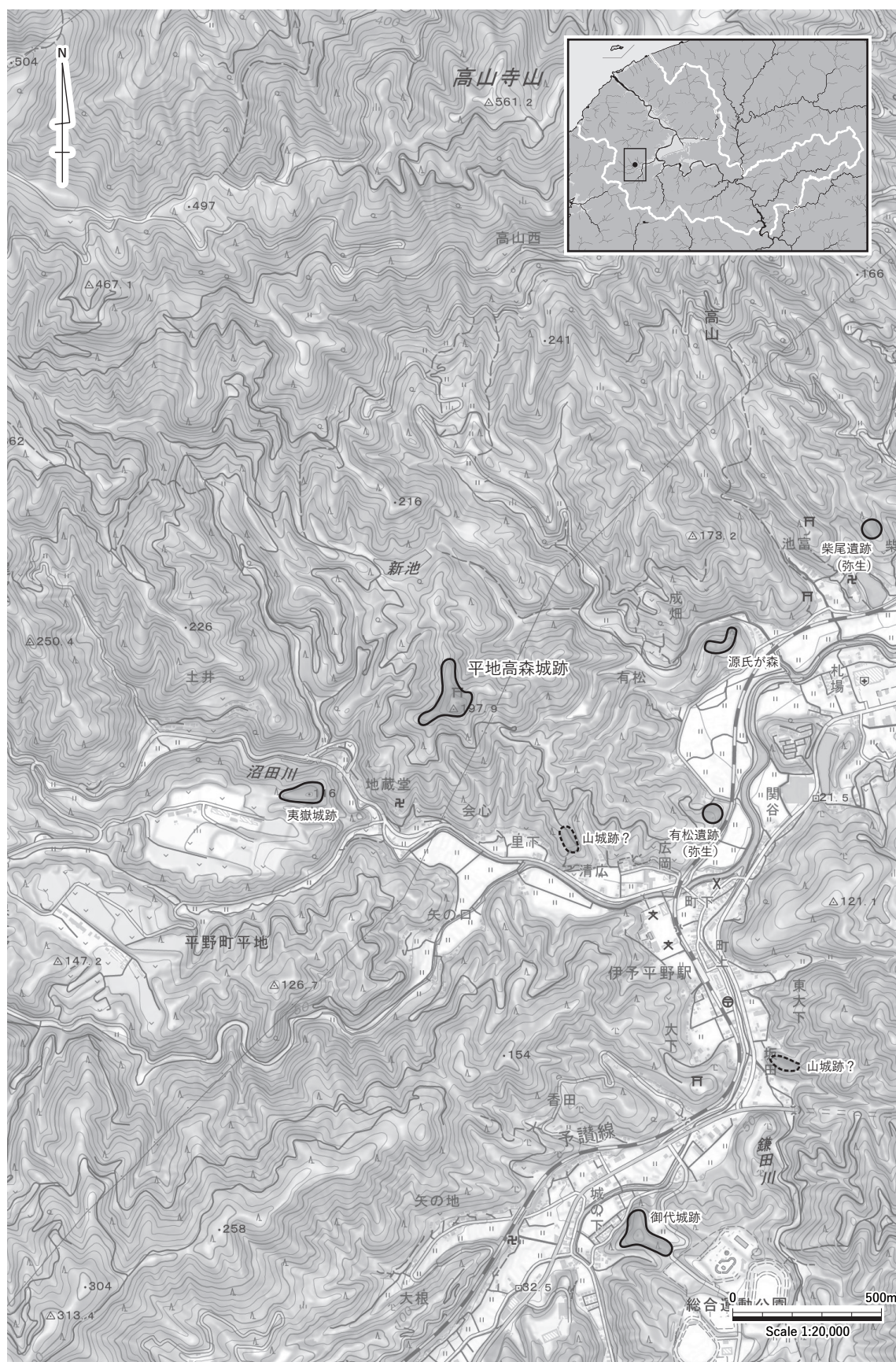


図2-09 平地高森城跡周辺地形図 ※地理院地図を加工

大洲地域に土佐の長宗我部勢が侵攻したと考えられる天正13(1585)年には、続いて豊臣秀吉の四国攻めがあり、伊予の大部分は小早川隆景領となったため、技術的模倣をするには期間が短すぎる。したがって、永禄11(1568)年に毛利勢が持ち込んだ技術を模倣し、長宗我部氏の侵攻に備えたものの可能性が高い。(日和佐)

(2) 文献・伝承・その他特徴

喜多郡の盟主であった宇都宮氏は、任官問題などを巡って勃発した鳥坂合戦(永禄11(1568)年)で伊予河野氏および毛利氏に敗れ、求心力を急激に失う。以降、喜多郡は津々喜谷氏や大野氏などの諸勢力が乱立する様相となる。

この頃、高森城跡のある平野地区一帯は、梶谷景則(新蔵丞)をはじめとする梶谷氏が支配していた。天和元(1681)年に成立した『宇和舊記』によれば、梶谷氏は高森城と、沼田川を挟んで南西側

に位置する夷嶽城の城主であったとされる。

この梶谷氏が代々残してきた『梶谷家文書』(愛媛県歴史文化博物館所蔵)には、中世文書4通が残されており、当時の高森城やその周辺状況を知るうえで重要である。このうち3通は伊予河野氏最後の当主である河野通直(牛福)が発給した文書で、残る1通は土佐の一条兼定が発給した文書となっている。

元亀4(1573)年に河野牛福(通直)が発給した宛行状(写真2-04)は、高森城の「取捨」(築城もしくは改修の意味か?)の恩賞として、梶谷景則に平地(大洲市平野町)と隣接する有松(大洲市阿蔵)の所領を与えるとしている。高森城が整備された経緯は不明だが、後述のように土佐の長宗我部氏と結んだ大野氏との緊張関係のほか、前年の元亀3(1572)年に豊後大友氏の勢力が上陸し、飯森城(八幡浜市保内町)で伊予西園寺氏と合戦になったことに対する警戒感もあったとみられる〔山内・

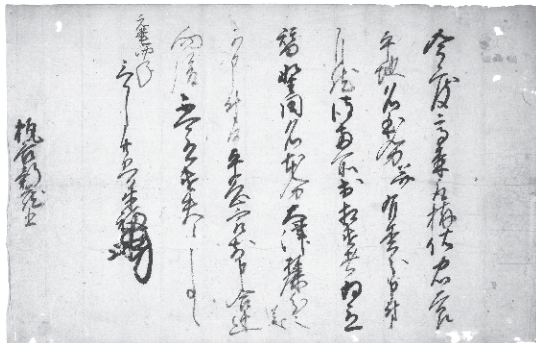


写真2-04 河野牛福(通直)宛行状「梶谷家文書」
(愛媛県歴史文化博物館 所蔵)

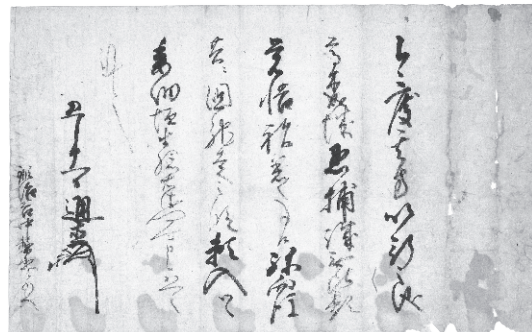


写真2-05 河野通直感状(五月一日)「梶谷家文書」
(愛媛県歴史文化博物館 所蔵)

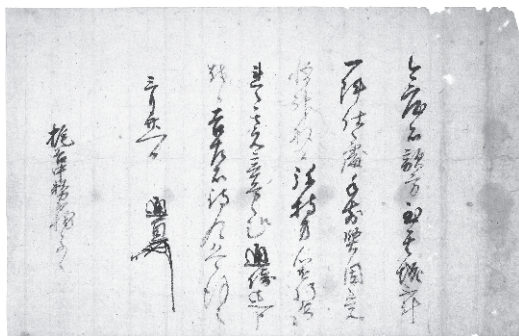


写真2-06 河野通直感状(三月二日)「梶谷家文書」
(愛媛県歴史文化博物館 所蔵)

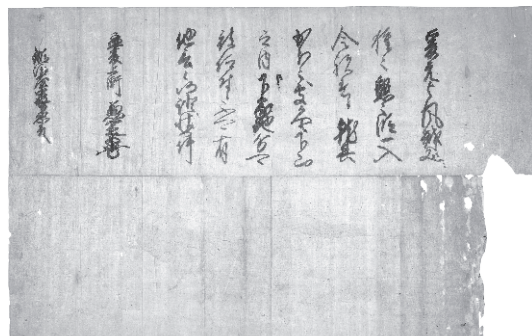


写真2-07 一条兼定宛行状「梶谷家文書」
(愛媛県歴史文化博物館 所蔵)

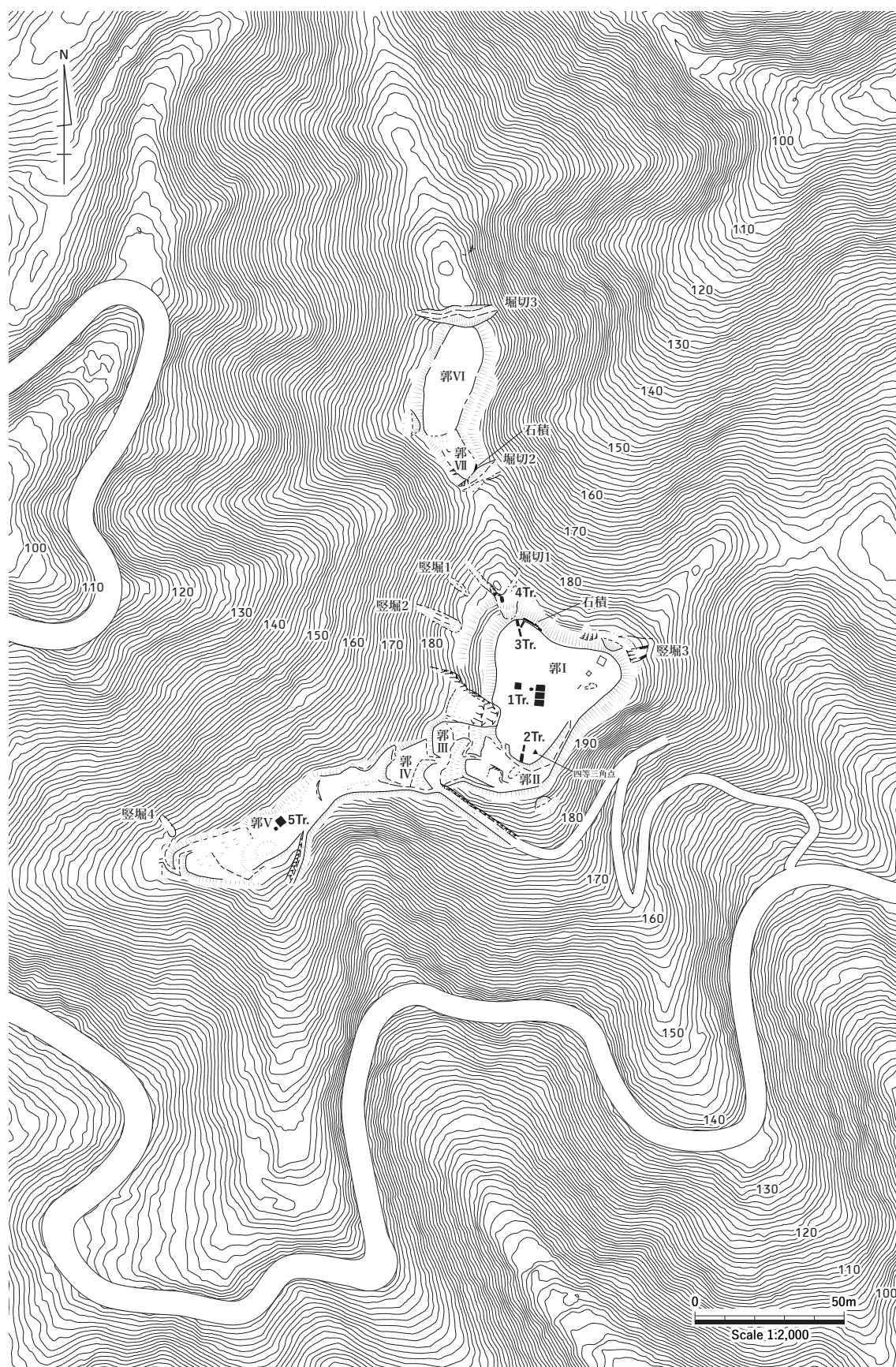


図2-10 平地高森城跡縄張図

石岡2007〕。

天正6(1578)年の発出と思われる河野通直の感状には、梶谷中務丞が高森城を忍びとったことが記され(写真2-05)、翌天正7(1579)年と思われる河野通直の感状には、敵勢力から城を防いだことが記されている(写真2-06)。これらのことから、梶谷氏は河野氏に与しており、一定の信頼を得ていたことがうかがえるほか、高森城を中心とした争乱が続いていたことが伝わる。ただし、これら史料のみでは、梶谷氏と敵対した勢力までは明らかにしない。

梶谷氏は、土佐一条氏とも親交があった。一条兼定が発給した宛行状には、兼定から梶谷氏に対し、懇意の見返りとして土佐国幡多郡下山郷の下家地(高知県四万十市西土佐)内に所領を与える旨が記されている(写真2-07)。この宛行状は天正5(1577)年もしくは天正6(1578)年に発出されたものと推定されている〔曽我編2024〕。時期としては、兼定が土佐を追われ豊後大友氏へ身を寄せたのち、渡川の合戦(天正3(1575)年)で長宗我部氏に敗れ伊予へ敗走した後のことである。本来、一条氏は河野氏側と敵対関係にあったはずだが、梶谷氏は厳しい状況に置かれた兼定を支援していたとみられる。

天正13(1585)年、羽柴(豊臣)秀吉による四国平定がはじまり、河野通直は小早川隆景に降伏した。四国平定後、伊予国は小早川隆景に支配されることとなり、とくに南予の支配は、大津城(のちの大洲城)を中心として猶子(養子)の小早川秀包がおこなった。

天正15(1587)年に隆景が九州へ移封となると、新たに戸田勝隆が喜多郡と宇和郡の領主となる。この戸田勝隆の入部にあわせて、梶谷景則の子息である梶谷中務少輔は帰農したと伝わっており、以降は平地村の名主となった。彼の子孫は平地村や野田村の番役を勤めている〔土居2000〕。

近世地誌には、さまざまな記述が残る。先ほどの『宇和舊記』の平地村の項目によれば、天正4(1576)年、土佐の長宗我部氏と結んだ大野直之が不意打ちで高森城を落とすものの、天正6(1578)

年には、梶谷景則の子息である中務少輔(中書)、左衛門尉、修理が高森城を奪還したようであり、先ほどの天正6(1578)の河野通直感状は、この奪還を指すとしている。

『西國太平記』巻之七(寛文3(1663)年)には、「鍛冶屋城」などとして表され、長宗我部氏の支援を受けた大野直之が、鍛冶屋城と八幡城(現在の大洲八幡神社裏か)を落とし、落城を喜んだ長宗我部氏が、直之に両城を与えたと記している。なお、『土佐物語』巻第十(宝永5(1708)年)でも同様のことを記しているが、鍛冶屋城の城主は佐久間安房守とされている。また、『大洲舊記』の菅田村や阿蔵村の項目には、宮内(岡宮内)という人物が「鍛冶谷之城(中務)」と交戦して負傷、敗走し、よほど無念であったのか(鍛冶谷之)城に向けて墓を建てるよう遺言したとも伝えられている。以上、近世地誌における高森城の描きかたは様々だが、平野地区周辺の情勢が極めて不安定であったことは読み取ることができるだろう。

高森城跡にまつわる民話も、現在までに複数伝えられている。高森城の水源地は、高森城の北にある高山地区の仙波にあり、この地区の老婆が水源地を教えてしまったため高森城は落城し、落城の祟りで老婆一家は離散してしまったという民話や、この水源地から高森城への引水の方法についても伝承されている。また、高森城跡から約1km西には「土井」と呼ばれる集落があり、高森城跡と夷嶽城跡の城主であった梶谷氏が居住したと伝わる〔宮尾2007〕。帰農し平地村庄屋となった



写真2-08 梶谷景則墓石(会心地区)

梶谷氏歴代の墓や、平地村庄屋跡も、この土井地区に残されている。
(藏本)

(3) 試掘調査

試掘調査は、主郭である郭Ⅰ、郭Ⅰ北側の堀切1、郭Ⅴに、トレンチ(試掘坑)を設けて実施した。

1 トレンチ(図2-11,12) 郭Ⅰのほぼ中央部に設定し、建物跡などの遺構検出を目的とした。地山面で柱穴などを複数検出したのちは、樹木などに影響が出ないようにトレンチを拡張させた。

1層は褐色砂質土の表土である。極粗砂を主体として堆積厚は10～20cmであり、表面は腐植土と植物の細根で覆われている。1層から陶磁器が1点出土している。2層は黄褐色砂質土であり、地山由来の角礫(5～20mm)がまじる。3層は明黄褐色砂質土で、トレンチ全体に広がる層ではなく、部分的に堆積している。シルトが含まれており、やや粘性がある。地山面は岩盤質で風化が著しく進行し、樹根によって大きく乱されているところもある。

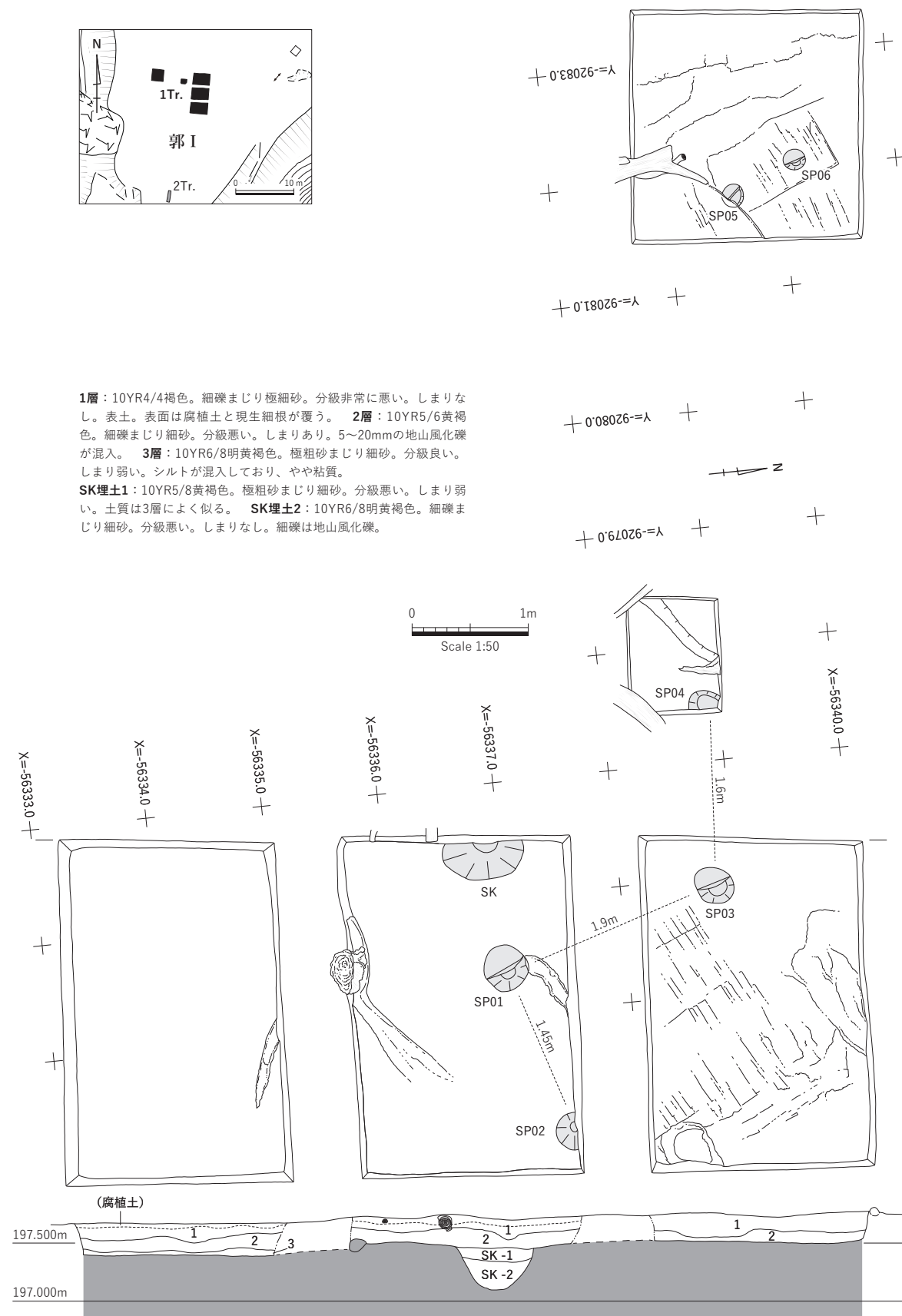
地山面では柱穴6基と土坑1基を検出した。柱穴は直径35cm程度のもの(SP01～04)と、直径20cmほどの小規模なもの(SP05, 06)とに分けられる。このうち、SP03は地山面から底までの深さが50cmになる。その他の柱穴はおおよそ深さ20cmとなっている。各柱穴間の間隔は、SP01-SP02間で1.45m、SP01-SP03間で1.9m、SP03-SP04間で1.6mなどとなり一定しておらず、現段階では建物に関する遺構であるとの判断はできない。土坑SK01はトレンチ西壁面にかかる状態で検出し、直径は70cm、地山面から底までの深さは40cmを測る。埋土は上下2層に分かれる。上層(埋土1)は黄褐色砂質土で、直接は覆っていないが3層の特徴に似ている。下層(埋土2)は暗褐色砂質土で、地山由来の細礫を多く含んでいる。これら遺構からの出土遺物はなかった。

この1トレンチでは、1層から陶磁器が1点出土している(図2-13)。05は磁器碗であり、近代以降のものとみられる。明赤褐色の口縁加工が内面

寄りに施され、見込みと外表面には呉須による文様が施される。

2 トレンチ(図2-14) 2トレンチは郭Ⅰ縁辺部の造成の有無などについて確認する目的で、曲輪の南端部に設定した。

地表面はトレンチ北側で水平をとるが、南側(切岸側)へ進むにつれ緩やかに傾斜角を増しながら切岸へいたる。1層は黄褐色砂質土の表土である。堆積厚は最大20cmで、表面は植物の細根で覆われている。2層は明褐色砂質土で、堆積厚はおおむね10cmである。南側(切岸側)は1層に切られるようになっている。3層は黄褐色砂質土で、しまりの強い層であり、地山由来の風化物を主体として堆積した状態である。4層は明褐色砂質土で、5～10mmの角礫が少量まじる。南側のトレンチでのみ堆積が確認でき、切岸側に向けて堆積厚が増す。この層の切岸側で、100～200mmの角礫が集中して出土している。規則的な配列ではなく、造成時の土留めとして人為的に置かれた可能性がある。これらの礫は保護することとし、一部以外は取り除いての掘削はおこなわなかった。5層は明褐色砂質土で、砂粒密度が高く固くしまる。堆積厚は5cm程度である。6層は明褐色砂質土で、土質は4層に近いが、10～30mmの地山由来の風化物が多量に混入する。堆積厚は最大で25cmである。7層は明褐色砂質土で、分級は他層よりも比較的良く、上の5層、4層よりもしまりが強い。堆積厚は10cm程度である。8層は明褐色砂質土で、しまりは強く、7層よりも砂粒の密度が高い。堆積厚はその他の層に比べて薄く、最大でも5cmである。9層は黄褐色砂質土で、5～20mmの礫がわずかに混入する。10層は明黄褐色砂質土で、非常に強くしまる。3層と同じく、地山由来の風化物を主体として堆積した状態である。堆積厚は20cmほどである。11層は明褐色砂質土で、しまりは7層と同程度の強さである。12層は黄褐色砂質土で、非常に固くしまる。土質は10層に近く、1～3mmの炭化物粒がごくわずかに混入する。堆積厚は20～30cmである。地山面



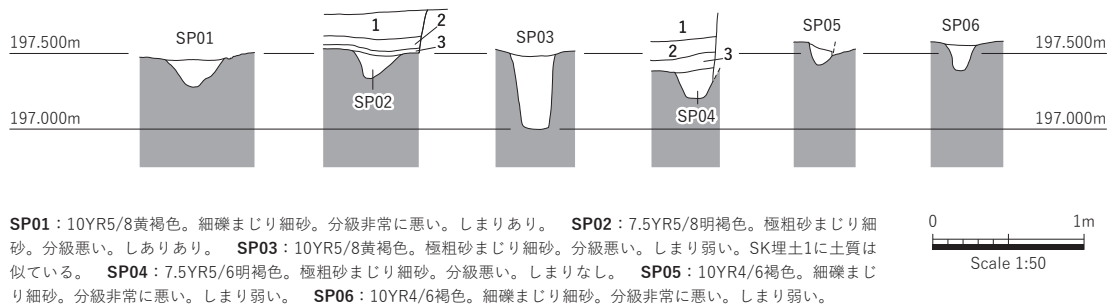


図2-12 平地高森城跡1 トレンチSP01～06土層断面図

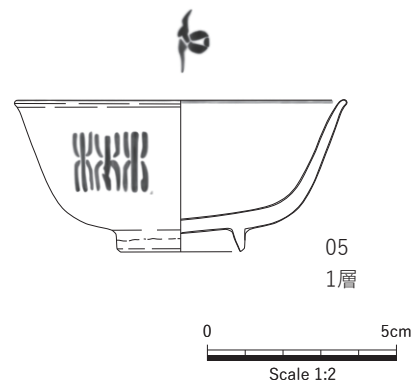


図2-13 平地高森城跡1 トレンチ出土遺物実測図

は岩盤質で、トレンチ北側から南側(切岸側)に向けて緩やかに傾斜している。地山面から地表面までの堆積厚は、トレンチ北側で30cm、南側(切岸側)で90cmである。

3～12層は、強度に差はあるがいずれも固くたたきしめられたような層であり、地山に由来する風化礫が多く含まれていることで共通し、人為的な盛土である。切岸に近い12層、10層、6層は比較的厚く堆積するが、1層の表土を除いたその他の層の堆積厚は5～10cm程度である。曲輪を整備するにあたり、まずは切岸側の傾斜面から大きく盛土して水平を確保し、その後は徐々に調整を重ねながら盛土したとみられる。

2層を掘り込んだ柱穴SPを断面で確認した。

埋土は明褐色砂質土だが、3層、4層よりもしまりが弱い。出土遺物はなく、時期は不明である。切岸の近くに位置することから、柵列の痕跡の可能性も考慮したが、切岸法肩から1.2mほど後退した位置にあるため、可能性は低いと考えられる。

このトレンチでの出土遺物はなかった。

3 トレンチ(図2-15,16) このトレンチは、2 トレンチと同じく郭Ⅰ縁辺部の造成状況を確認する目的で設定したほか、郭Ⅰ北東に遺存する石積の構造や時期を明らかにする目的で設定した。前者の目的のために設定したトレンチを3 トレンチ(Tr.)①、後者の目的のために石積背面へ設定したトレンチを3 トレンチ(Tr.)②とする。

3 Tr.①の地表面は、北側トレンチの南端付近から緩やかに切岸に向けて傾斜している。1層は褐色砂質土の表土で、表面は腐植土と植物の細根に覆われる。堆積厚はおおよそ10～15cmである。以下の層はしまりが強く、かつ、分級が悪いことで共通する。2層は明褐色砂質土の薄層で、しまりは強く、10～30mmの礫が少量含まれる。3層は北側(切岸側)に堆積する明褐色砂質土で、しまりは強く、5～10mmの礫が多く混入する。4層は明褐色砂質土だが、5～10mmの礫が詰められたような堆積状況である。しまりは非常に強く、炭化物粒がわずかに含まれる。5層は明褐色砂質土で、しまりは強い。10～50mmの扁平な礫が多量にまじる。6層は明褐色砂質土で、しまりは上層の2層および5層よりも弱い。また、礫の混入は2層および9層よりも少ない。7層は橙色砂質土で、しまり強く、30～50mmの礫が少量まじる。8層は黄褐色砂質土で、30～50mmの礫が混入するものの、上下層よりもその量は少ない。5mm程度の炭化物粒をわずかに含む。東側に向けて堆積厚を増している。9層は明黄褐色砂質土だが、10～100mmの地山由来の風化礫で構成されたような堆積状況となっている。10層はにぶい黄褐色砂質土で、10～50mmの地山の風化礫が主になり、この状況は9層に似ている。西側に向けて堆積厚を増している。11層は橙色砂質土で、しまりは強く、10mm程度の礫がわずかに混入する。また、地山に由来する偽礫状ブロック(明赤褐色砂質土)もわずかに含まれる。12層は明褐色砂質土で、しまりは強いが崩れやすい。10～30mmの地山風化礫が中心となる層である。13層は明褐色砂質土で、3 Tr.①では最もしまりが強い。地山風化礫がまじる量は多いものの、9層、12層と比較すると少ない。14層は明黄褐色砂質土で、しまりは強い。土質は11層に似ているが、地山に由来する偽礫状ブロックの混入はさらに少ない。

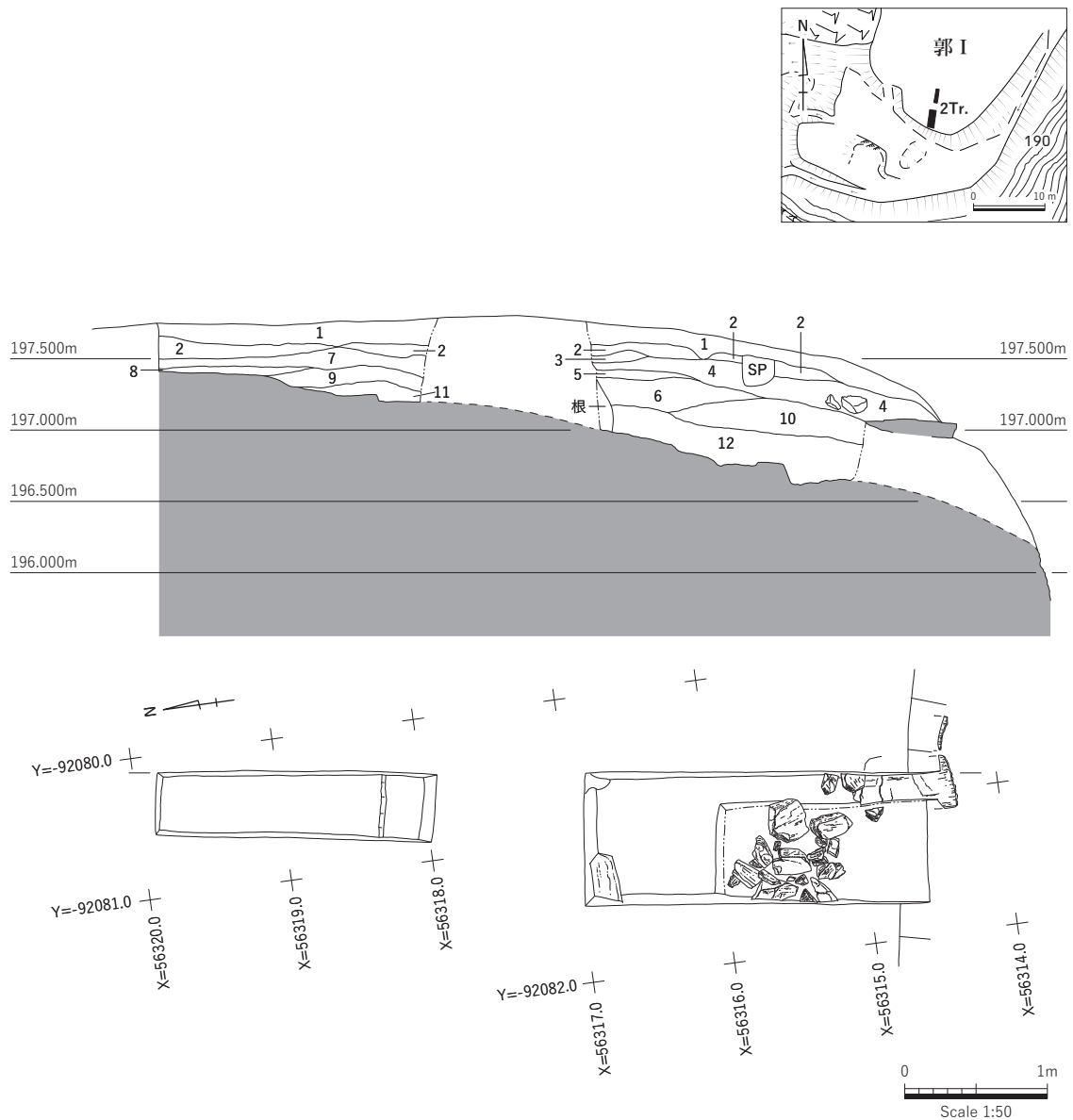
表土にあたる1層を除けば、強度に差はあるものの、各層は固くしまった層であり、また、地山に由来する風化礫が多く含まれていることで共

通するため、人為的な盛土であることがわかる。南側トレンチの堆積層(2, 5, 6, 13層)は堆積厚が20cm未満であるのに対し、北側の切岸に近い堆積層(3, 4, 7, 8, 11, 14層)は堆積厚が30～40cmとなり、切岸に向けて1層当たりの厚さが増している。曲輪の整備にあたり、最初に切岸側の傾斜面から大きく盛土して水平を確保したと考えられ、2トレンチでみられるような造成方法に近い。なお、4層において、土留めと推定した50～150mmの地山風化礫を複数検出し、図化・撮影した。しかし、2トレンチで検出した土留めと比較すると礫の規模が小さく、また、礫間の間隔もまばらであるため、積極的に土留めとは判断できない。

地山面は岩盤質で、緩やかに切岸側に向けて傾斜している。地山面から地表面までは、切岸側の深いところで150cm、曲輪側で40cmである。

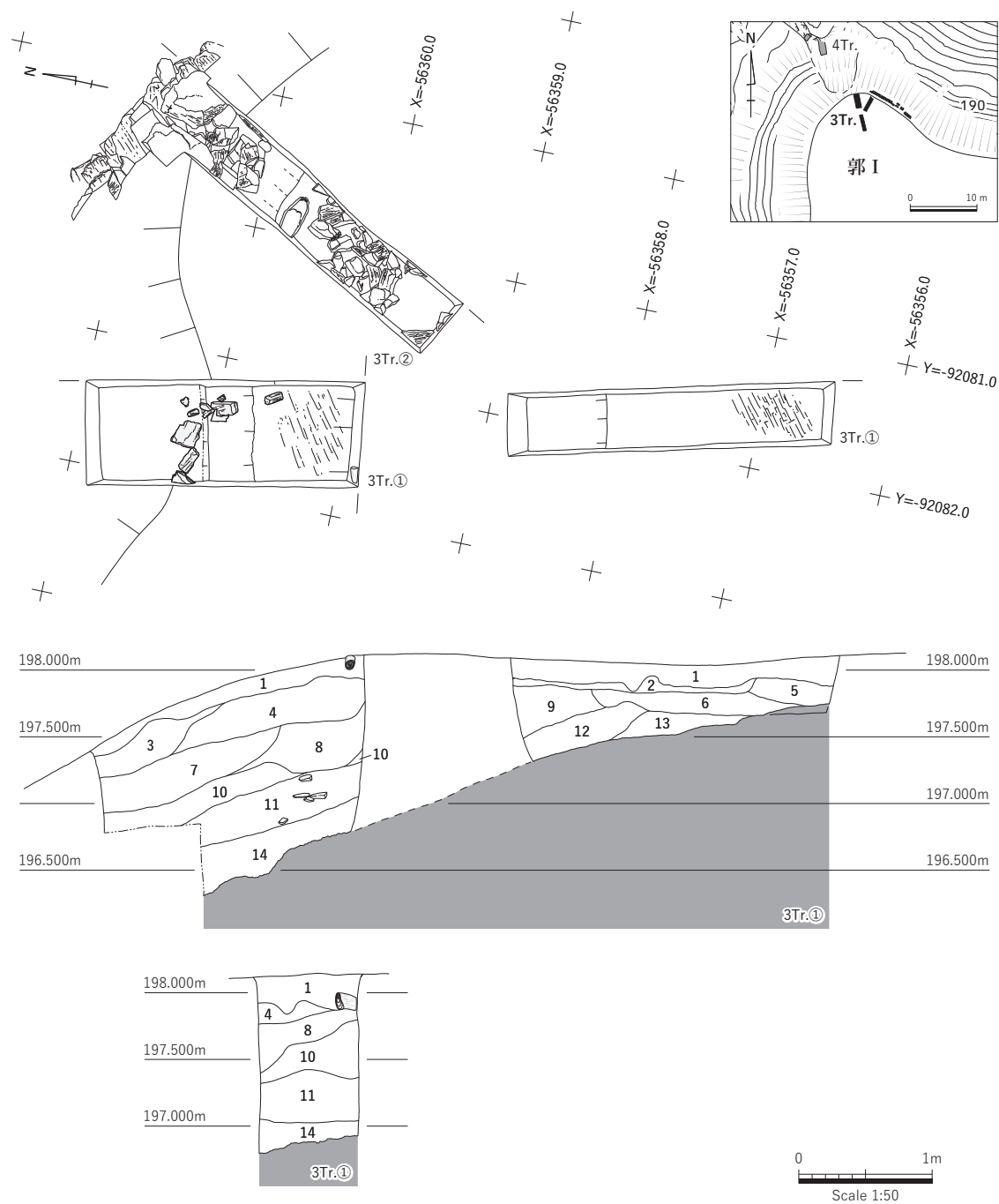
出土遺物はなかった。

3 Tr.②の1層は、褐色砂質土の表土で、表面は植物の細根で覆われる。堆積厚は南側で20cmであり、3 Tr.①の1層と同質である。陶磁器片1点が出土した。2層は石積の天端石の上に堆積している黄褐色砂質土で、しまりはなく崩れやすい層である。3層は明褐色砂質土で、30～50mmの扁平な地山風化礫が多量にまじる。陶磁器片1点が出土している。4層は褐色砂質土で、しまりは弱い。5層は黄褐色砂質土で、しまりは強い。50～200mmの地山風化礫が集中しているが、これは盛土造成のための土留めと思われる。ただし、計画的に並べられたような配置ではない。6層は黄褐色砂質土で、5～20mmの地山風化礫が多量にまじる。しまりはなく、崩れやすい。7層は石積の背面で裏込石とともに堆積しているもので、明褐色砂質土である。分級は悪いものの、他層と比べると砂粒の粒径は比較的揃っている。地山面は石積側へ緩やかに傾斜するが、その傾斜角は3 Tr.①の地山面よりも緩やかである。なお、この地山面は石積前面から1.2m後方で急に落ち込む。これは、石積構築のための削平によるものとみられる。石積の背面は50～200mmの地山風化礫に



1層：10YR5/6黄褐色。極粗砂まじり極細砂。分級非常に悪い。しまりなし。表土。表面は現生細根が覆う。**2層**：7.5YR5/6明褐色。極粗砂まじり極細砂。分級非常に悪い。しまりあるが強くなく崩れやすい。**3層**：10YR6/6明黄褐色。細礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまり強い。地山碎屑物が堆積したような状態。**4層**：7.5YR5/8明褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまりは3層と同程度。5～10mmの礫が少量混入。**5層**：7.5YR5/8明褐色。極粗砂まじり極細砂。分級悪い。砂粒密度高く固くしまる。上下層と比べて分級良いため目立つ。**6層**：7.5YR5/8明褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。4層に近い土質だが、10～30mmの地山碎屑物が多量に混入。**7層**：7.5YR5/8明褐色。極粗砂まじり細砂。分級普通。上の2層よりもしまり強い。**8層**：7.5YR5/8明褐色。極粗砂まじり細砂。分級普通。しまり強い。7層よりも砂粒密度高い。**9層**：10YR5/6黄褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。5～20mmの礫がわずかに混入。**10層**：10YR7/6明黄褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまりは7層に近い。地山碎屑物が堆積したような状態。**11層**：7.5YR5/8明褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまりは7層に近い。**12層**：10YR5/6黄褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまり堅固。土色異なるが、土質は10層とほぼ同じ。1～3mm程度の炭化物粒がごくわずかに混入。**SP埋土**：7.5YR5/6明褐色。細礫まじり細砂。分級悪い。しまり強いが、3,4層よりも弱い。

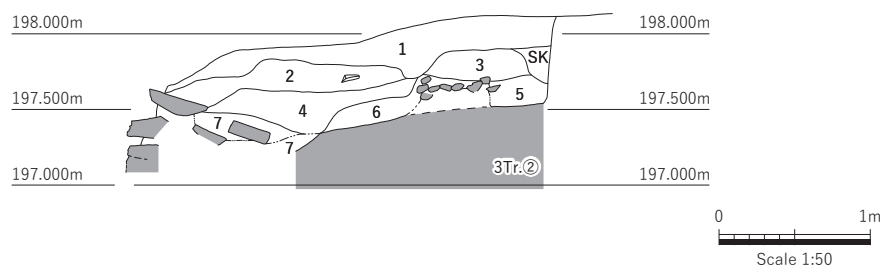
図2-14 平地高森城跡2トレンチ平面図・東壁土層断面図



【3Tr.①】

1層：10YR4/4褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまりなし。表面は腐植土と現生細根が覆う。**2層**：7.5YR5/6明褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまり強い。10～30mmの礫が少量混入。**3層**：7.5YR5/6明褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。5～10mmの礫が多く混入。**4層**：7.5YR5/6明褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。5～10mmの礫で詰まっているような状態。炭化物粒がわずかに混入。**5層**：7.5YR5/6明褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。10～50mmの扁平な礫が多量に混入。**6層**：7.5YR5/6明褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまりは2,5層より弱め。礫の混入は5,9層に比べて少ない。**7層**：7.5YR6/8橙色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。30～50mmの礫が少量混入。**8層**：10YR5/8黄褐色。礫まじり細砂。分級悪い。しまりは2層と同程度。5mm程度の炭化物粒がわずかに混入。**9層**：10YR6/6明黄褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。10～100mmの地山碎屑物の堆積層。**10層**：10YR7/4にぶい黄褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。地山碎屑物が主体。10～50mmの扁平な礫で充填された状態。**11層**：7.5YR7/6橙色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。10mm程度の礫が少量混入。地山由来の偽礫状ブロック（5YR5/8明赤褐色）も少量混入。**12層**：7.5YR5/8明褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強いが崩れやすい。10～30mmの地山碎屑物の堆積層。**13層**：7.5YR5/6明褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。3Tr.①では最もしまり強い。9,12層よりも少ないが、地山碎屑物の混入多い。**14層**：10YR6/6明黄褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。土質は11層に似るが、偽礫状ブロックの混入少ない。

図2-15 平地高森城跡 3 トレンチ平面図・3 トレンチ①東壁・南壁断面図



【3Tr.②】

1層：10YR4/6褐色。細礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまりなし。表土。
2層：10YR5/6黄褐色。極粗砂まじり細砂。分級非常に悪い。しまりなく崩れやすい。
3層：7.5YR5/6明褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。30～50mmの扁平な地山碎屑物が多量に混入。
4層：7.5YR4/4褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまりあるが弱め。
5層：10YR5/8黄褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまり強い。土留めと思われる。50～200mmの礫が混入。
6層：10YR5/6黄褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまりなく崩れやすい。5～20mmの角礫が多量に混入。
7層：7.5YR5/8明褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまりあるが削りやすい。
SK埋土：7.5YR5/6明褐色。極粗砂まじり細砂。分級普通。しまり堅固。他層と比べ分級が良いため目立つ。

図2-16 平地高森城跡 3 トレンチ②東壁土層断面図

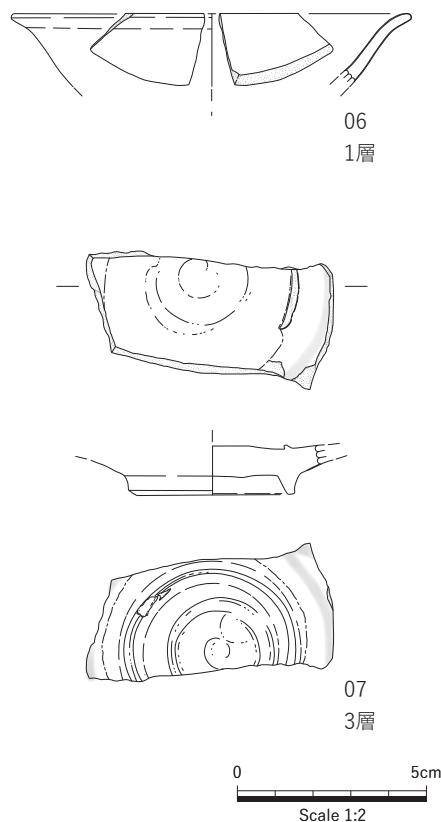


図2-17 平地高森城跡 3 トレンチ②出土遺物実測図

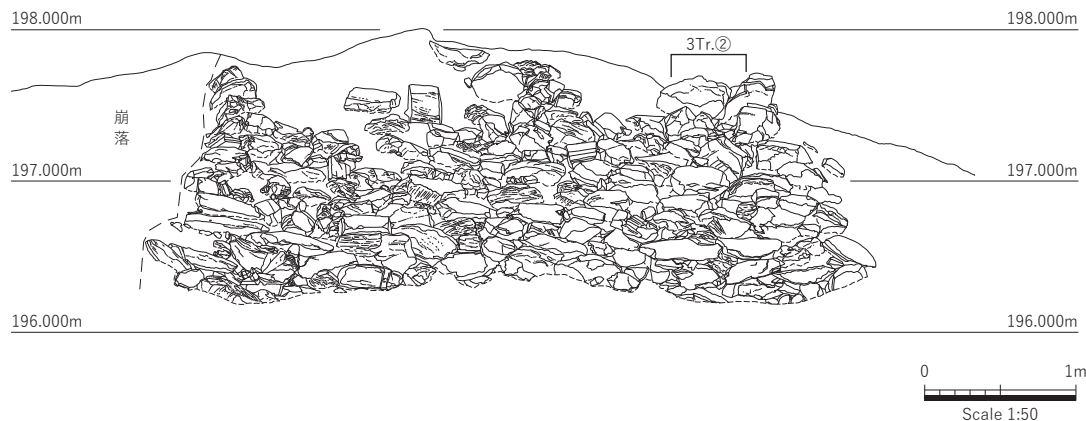


図2-18 平地高森城跡 郭Ⅰ 石積立面図

よる裏込のみであり、裏込と地山の間に盛土はされない。

断面で土坑と思われる遺構1基(SK)を確認した。3層を掘り込んでおり、埋土は明黄褐色砂質土で、強くしまる。

1層と3層で1点ずつ遺物が出土している(図2-17)。1層で出土した06は、白磁皿の口縁部片で、景德鎮窯のものとみられる。森田分類の皿E-2類に相当するとみられ、時期は16世紀前半と考えられる〔森田1982〕。3層で出土した07は、青花皿の底部片で、漳州窯系とみられる。高台の外径は4.4cmを測る。文様の内容については不明である。小野分類の染付皿E群に相当するとみられ、時期は16世紀中葉～後葉と考えられる〔小野1982〕。

郭Ⅰ 石積(図2-18) 郭Ⅰに残存している石積は、延長3.9mである。郭Ⅰ北端の東寄りに、北西―南東方向に築かれており、南東部はすでに崩落してしまっている。崩落部も含めると、少なくとも延長8mの規模であったと見込まれる。石積の現在の下端部から天端までの高さは約1.8mである。なお、石積の前面は急傾斜で危険であったことから、根石を確認する調査は実施していない。そのため、本来はさらに高く築かれていた可能性がある。

築石は周辺で採集が可能な泥質片岩であり、地山と同じである。片理が発達しており、総じて扁平な形状である。多くは風化が進行しており脆い。築石1石の大きさは10cmから50cmを超えるものまで多様であり、統一性はみられない。築石は乱積みで積まれるが、石積の上部は築石と築石との接する箇所が減り、間隙が増える。これは、経年による抜け落ちや転落のためと考えられる。3 Tr.②でもみたように、背面構造が簡素なものであり、また、風化の進行が早く脆弱な泥質片岩を使用したことが原因とみられる。

4 トレンチ(図2-19) 郭Ⅰ北側の切岸直下に設けられた堀切1について、堀底の形状確認などを目的として2箇所設定した。平面形でV字を呈する堀切1の先端部に4 トレンチ(Tr.)①を、1.5m北西で堀切がすばまった地点に4 トレンチ(Tr.)②を設定した。

4 Tr.①の1層は黄褐色砂質土の表土である。ほぼ切岸側からの崩土で形成されており、地山由来の砂礫が主体である。表面は部分的に植物細根が覆う。2層は明褐色砂質土で、1層と同じく切岸側からの崩土によるものとみられる。地山由来の扁平な礫(5～20mm)が多量にまじる。3層も明褐色砂質土で、地山由来の礫が多量にまじり、

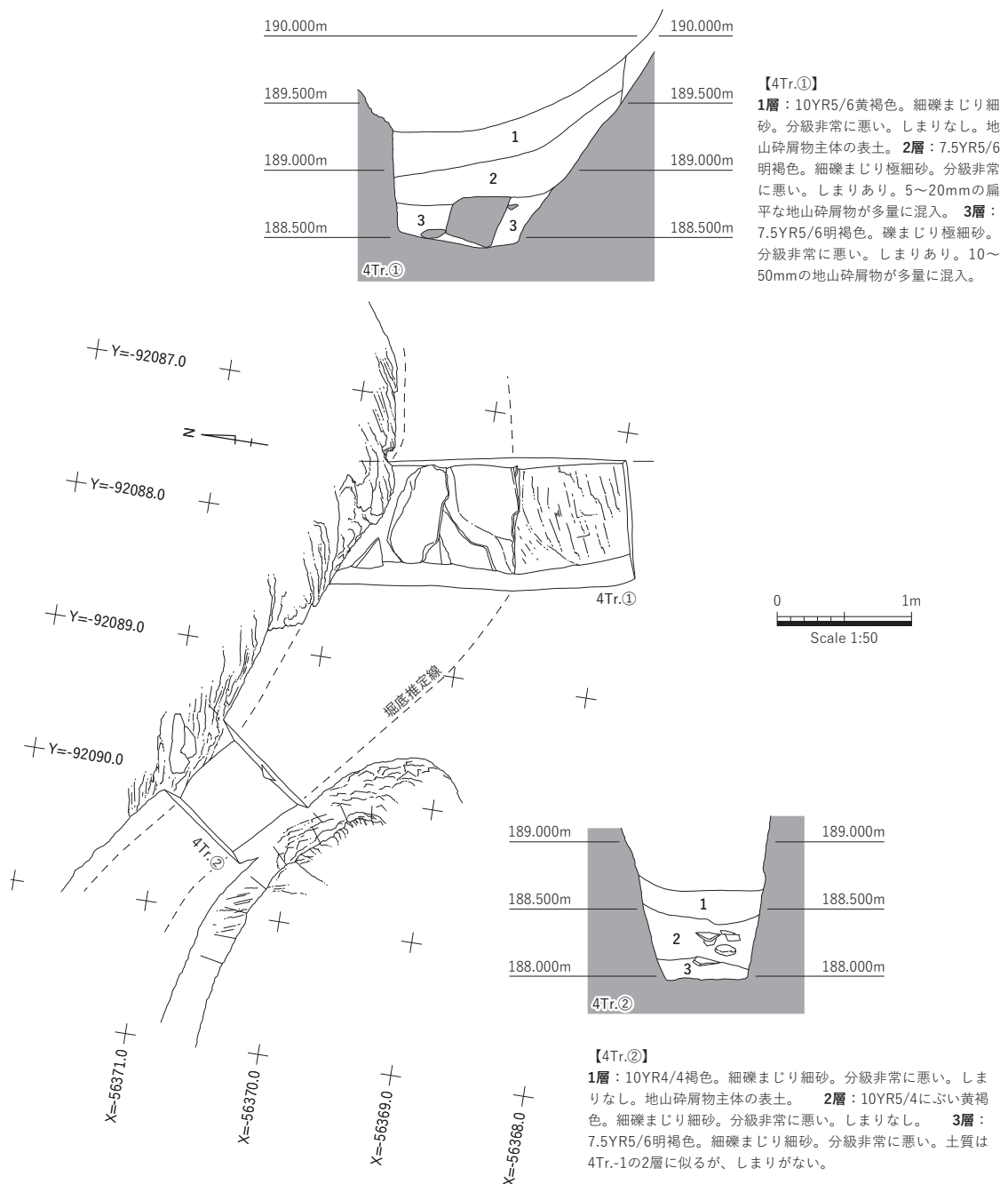
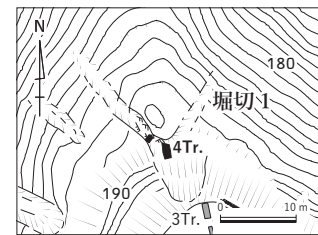
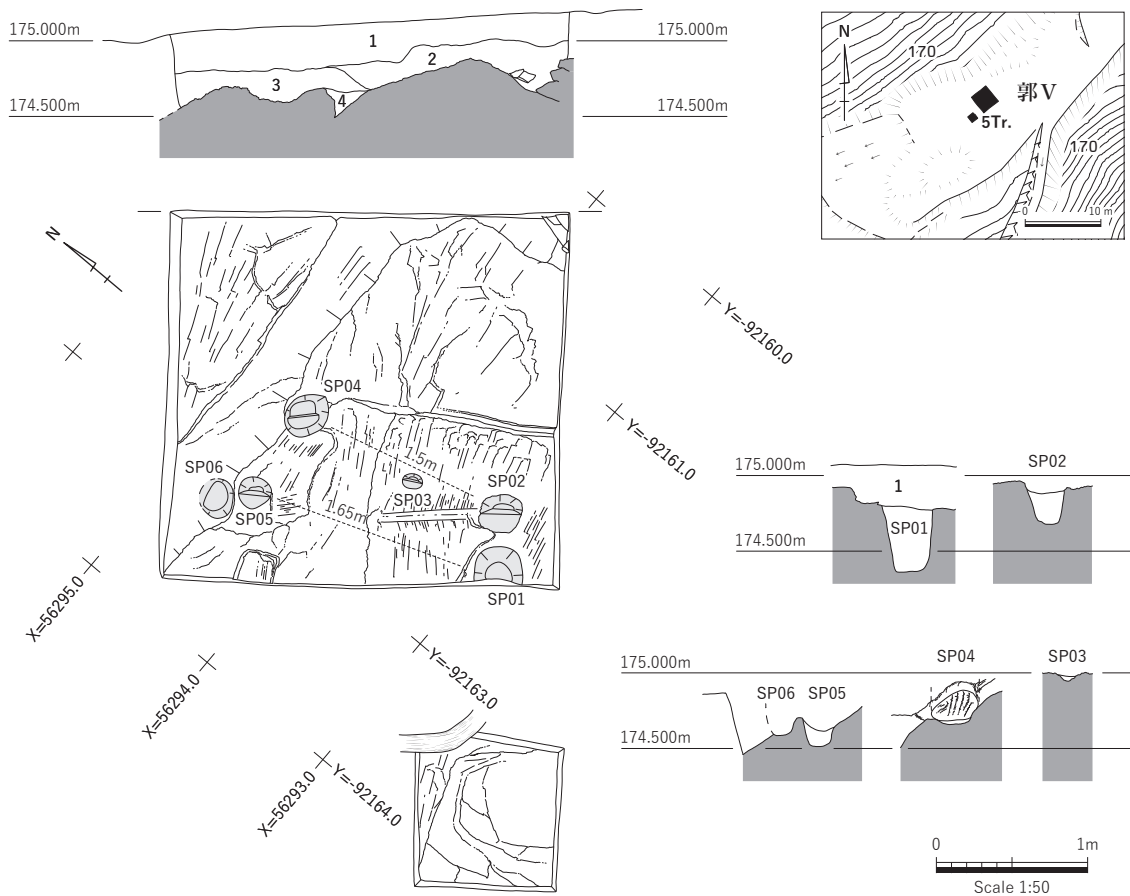


図2-19 平地高森城跡4トレンチ平面図・東壁土層断面図

第2章 中世城館跡の調査
平地高森城跡



1層：10YR5/6黄褐色。細礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまりなし。表面は腐植土と現生細根が覆う。表土。 **2層**：10YR5/6黄褐色。細礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまりなし。10～50mmの地山碎屑物が多数混入。 **3層**：7.5YR6/6橙色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。10～30mmの地山碎屑物が多数混入。 **4層**：5YR5/6明赤褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまり堅固。地山（岩盤）の亀裂に堆積。
SP01埋土：10YR5/8黄褐色。極粗砂まじり極細砂。分級悪い。しまり弱い。30～50mmの地山碎屑物が混入。 **SP02埋土**：7.5YR5/6明褐色。極粗砂まじり極細砂。分級普通。しまり弱い。埋土上部で鉄滓出土。 **SP03埋土**：10YR5/6黄褐色。極粗砂まじり極細砂。分級普通。しまり弱い。 **SP04埋土**：10YR5/6黄褐色。細礫まじり極細砂。分級悪い。しまりはSP01～04より強め。 **SP05埋土**：7.5YR5/6明褐色。極粗砂まじり極細砂。分級普通。しまり弱い。土質はSP02埋土に似る。 **SP06**：（埋土なし）

図2-20 平地高森城跡5トレンチ平面図・東壁土層断面図

礫の大きさは10～50mmと、全体的に2層よりも大きい。また、堀底を塞ぐように巨礫数石が転落している。

堀の断面形は箱堀であり、堀底の幅は85cmである。尾根側は堀底からほぼ直立するが、切岸側は53度の傾斜がつき、逆台形の断面となる。堀底から地表面までの堆積厚は90cmであり、郭Ⅰまでの高低差は9.5mを測る。

4 Tr.②の1層は褐色砂質土の表土で、4 Tr.①と

同じく地山崩土で形成されており、地山由来の砂礫が主体である。2層はにぶい黄褐色砂質土で、しまりはない。3層は明褐色砂質土で、土質は4 Tr.①の2層に似ているが、しまりが無い。

堀の断面形は4 Tr.①と同じく逆台形の箱堀となるが、堀底の幅は狭くなり、60cmとなっている。

4 Tr.①、②のいずれでも出土遺物はなかった。また、^{つよて}飛礫が疑われるような礫の集積なども確認はできなかった。

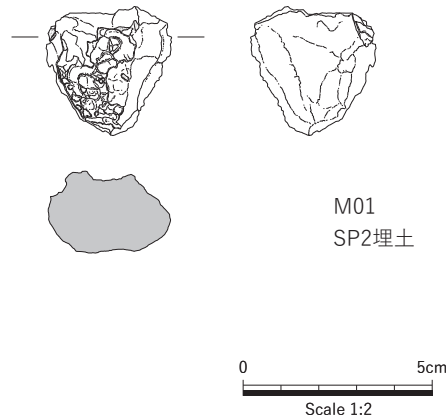


図2-21 平地高森城跡5トレンチ出土遺物実測図

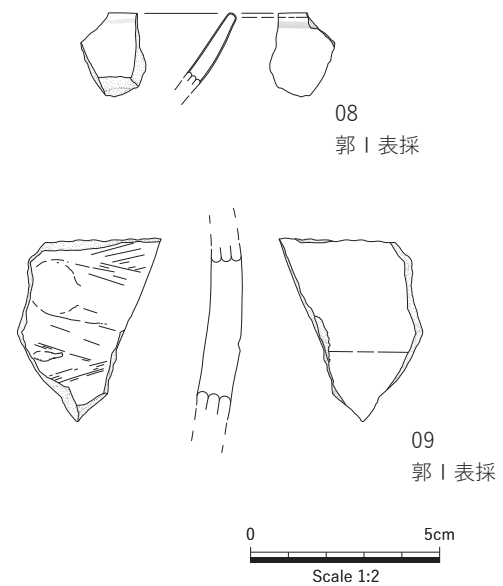


図2-22 平地高森城跡 郭I 採集遺物実測図

5トレンチ(図2-20) 郭Vは従来、曲輪としてあまり認知されていなかった。このため、遺構の有無を明らかにし、曲輪として機能していたかを探る目的でトレンチを設定した。

1層は黄褐色砂質土の表土で、堆積厚は15～25cmになる。表面は腐植土と植物の細根で覆われる。2層は黄褐色砂質土で、しまりはなく、10～50mmの地山由来の角礫が多数まじる。3層は橙色砂質土で、しまりが強く、地山由来の角礫が多数まじるが、2層と比べて粒径は小さく、10～30mmほどである。4層は明赤褐色砂質土で、岩盤質な地山の亀裂に堆積している。地山面は不陸が著しく、全体的に北側(谷側)へ向けて傾斜している。不陸は、樹根などによる攪乱の影響のほか、浸食作用による地山の崩落が考えられる。

地山面では柱穴6基を検出した。柱穴の直径はおおよそ20～30cmであるが、SP03のみ直径13cmと小型である。最大のSP01は、地山面からの深さが40cmになる。隣接するSP02では、埋土の上部から鉄滓1点が出土した。SP04～06の位置は、地山面が大きく荒れ、北側(谷側)に向けて傾斜していくところであり、痕跡程度にしか残さ

れていなかった。本来はSP01やSP02のような柱穴であったものと思われる。とくにSP06は、掘削当初、柱穴ではなく地山が浸食されてできた形状と認識してしまっていたため、埋土を除去してしまっている。柱穴間の間隔は、SP01-SP04間、SP01-SP05間、SP02-SP05間でそれぞれ1.65m、SP02-SP04間で1.5mである。

SP02埋土で出土した鉄滓M01は(図2-21)、碗形滓の一部とみられる。わずかだが着磁性がある。下半は炉底の一部とみられ、被熱した砂粒が付着している。3mm程度の扁平な細礫も付着しているが、これは地山に由来するものである。重量は28.6gと大きさに対して重量感があるため、非鉄不純物が溶出したあとに鉄分が逃げ込んで生成されたものと思われる。なお、この鉄滓の発見を受け、トレンチ全体で被熱痕跡や金属反応、磁気反応について確認をおこなったが、いずれも検知できなかった。

郭I表面採集遺物(図2-22) 郭Iで採集した08は、青花の皿もしくは碗の口縁部片である。口縁の内外面に薄い圈線が描かれる。細片であるため、口径の復元や時期比定は難しい。09は備前焼の破

片であり、小型壺の胴部片とみられる。胎土には粗砂～極粗砂の長石、石英が多く含まれる。

(藏本)

(4) 試掘調査の成果

試掘調査を、主郭である郭Ⅰで3箇所、主郭北の堀切1で1箇所、これまで曲輪が不明確であった郭Ⅴで1箇所の、合計5箇所で行った。

1トレンチでは、郭Ⅰの中心部を調査した。柱穴6基と土坑1基を検出したが、調査範囲が限定的であったため、残念ながら各柱穴間の関係性や建物跡の存在を明確にするまでにはいたらなかった。しかし、遺構の検出状況をみると、仮に建物跡が存在していたとしても、その数は多くなかったとみられる。

2トレンチでは、郭Ⅰ南側の縁辺部の造成痕跡を確認した。地山面は緩やかに南側へ傾斜するが、切岸を造りだすために切土されている。また、切岸側の地山面直上から厚め(20～30cm)に盛土し(12, 10層)、その後は水平を調整するように盛土を薄く重ねて造成している。土留めのためと考えられる礫群も出土しているが、地山面よりも約50cm浮いた位置に置かれてあることから、大きく盛土したあとの水平面の調整に機能したのかもしれない。

3トレンチでは、2トレンチと同様に造成と切岸構築の痕跡を明らかにすることができ、ま

た、石積の背面構造を把握することができた。3 Tr.①と3 Tr.②は2mほどしか離れていないにも関わらず、地山面の水準は3 Tr.②よりも3 Tr.①のほうが80～110cmも低い。これは、3 Tr.①側の旧地形が谷状になっていることを示唆するものであり、地山が脆弱であることから、崩落の可能性も考えられる。図2-23で模式的に示すとおり、3 Tr.②側は急傾斜を確保するために切土して石積を築くが、谷状地形となっている3 Tr.①側は、盛土を重ねて3 Tr.②側と同じ水準まで造成し、曲輪の拡張と切岸の形成を実現している。また、3 Tr.②側は、石積の後方で土留めと思われる礫群を検出した。これは2トレンチで検出した土留めの礫よりもやや小ぶりだが、地山面から浮いた位置にあることから、2トレンチと同様、水平面の調整に機能させたと思われる。

石積築石の大きさは10～50cmで、大きさに統一性はない。また、背面構造として裏込を有するが、築石の背後60～80cmの間に角礫を充填するだけの簡素なつくりであるため、不安定で脆弱である。実際、遺存している石積は、本来の半分程度の延長であり、残りは斜面下へ崩落してしまっている。実戦に備えるための築造と考えられるが、周辺で簡単に採集でき、かつ、脆弱な泥質片岩を利用するなど、比較的簡便に築かれている。

4トレンチでは、堀切1の堀底形状が逆台形の箱堀であることが判明した。堀切1の平面形はV



作画協力:堀本春菜

図2-23 平地高森城跡 郭Ⅰ造成の模式図

字状を呈しているが、屈曲部(郭Ⅰ側)から郭Ⅵ側に向けて堀底がすばまるように掘削されている。堀切1の屈曲部に設定した4 Tr.①の郭Ⅰ側以外は、いずれも岩盤をほぼ直角に切り落として堀切を形成している。現在、埋没部よりも上部の岩盤は浸食作用によって崩落し、傾斜がついているが、本来はさらに高い位置からほぼ垂直に岩盤が切り落とされていたものと推測される。4 Tr.①の郭Ⅰ側は、53度の傾斜がついており、ほかの地点とは対照的である。これは、郭Ⅰから堀底に向けて死角を排除する目的があったと推定され、堀切へ集中した敵勢力に向けて、弓矢などを効果的に射込むためと考えられる。城が実戦を意識して築かれたことを示す証左といえよう。

5 トレンチでは、柱穴6基を検出しており、時期の特定できる遺物の出土はなかったものの、この平坦面(郭Ⅴ)が曲輪として機能していた可能性が高まった。また、SP02で出土した鉄滓に注目したい。出土した鉄滓は、椀形滓の一部とみられ、下半は炉底の一部と考えられる。この炉底と思われる部分に砂粒が付着しているが、これは現地の基盤となっている泥質片岩であり、この付近で生成された、つまり鍛冶がおこなわれていた可能性を示している。5 トレンチの地山面は全体的に浸食作用を強く受け、遺構の遺存状況も芳しくないことから、残念ながら鍛冶で生じる鍛造剥片の発見、被熱痕や磁気反応の確認までは叶わなかった。

なお、まだ大洲市内の中世城館跡での鍛冶関連遺物の検出例はわずかであるが、猿ヶ滝城跡(大洲市肱川町予子林)では、主郭からもっとも離れた曲輪で鉄滓2点が表面採集されており〔藏本・日和佐2022〕、本城跡と同じ傾向といえる。大洲地域における城館跡の生産空間の一側面を捉えている可能性があり、今後の事例の増加を期待したい。

高森城跡での出土遺物、採集遺物はごくわずかであり、図化可能であったものは、上述の鉄滓を含めて6点しかない。近世以前で時期が絞れる陶磁器では、06の白磁が16世紀前半、07の青花が16世紀中葉～後葉とされ、文献史料によって城が機能したとされる時期とおおむね符合する。ただし、造成時の盛土から出土した陶磁器は07の青花のみであることから、郭Ⅰの造成時期や画期、改築の有無などについては詳述が難しい。

また、土師質土器が1点も確認できなかったことは特筆すべきである。土師質土器の少なさは、本城が居住や饗応の空間ではなく、前項で記したとおり「詰の城」として機能していたことを表すひとつの指標となっているのかもしれない。

平野地区には複数の城跡が残されているが、平地高森城跡はその象徴ともいえる存在であり、また、実戦を経験した城跡として歴史的に重要である。今回、試掘調査を実施できた範囲は限定的であったが、以上のような重要な成果を得ることができた。(藏本)

第2章 中世城館跡の調査
平地高森城跡

表2-02 平地高森城跡 土器・陶磁器一覧表

番号	出土位置			遺物内容			寸法			色調	特徴	挿図 番号	図版 番号
	郭	トレンチ	層位 遺構	種別	器種	部位	器高 (mm)	口径 (mm)	底径 (mm)				
05	郭Ⅰ	1	1層	染付	碗	口縁～ 底部	40	(88)	(34)	胎土:5Y8/1灰白	近代以降。明赤褐色の口縁加工。外面と見込みに呉須による文様あり。	2-13	25-1
06	郭Ⅰ	3-②	1層	白磁	皿	口縁	19	(106)	—	胎土:2.5Y8/3淡黄	景德鎮窯。	2-17	25-2
07	郭Ⅰ	3-②	3層	青花	皿	底部	13	—	(44)	胎土:7.5YR7/6橙	漳州窯系。見込みと高台から外底部にかけては露胎。	2-17	25-2
08	郭Ⅰ	—	表採	青花	皿 もしくは 碗	口縁	22	—	—	胎土:2.5Y8/3淡黄	口縁内外面に薄い圈線が1条。	2-22	25-3
09	郭Ⅰ	—	表採	備前焼	小型壺?	胴部	48	—	—	外面:10YR3/3暗褐 内面:10YR4/1褐灰	内外面に回転ナデ痕跡。	2-22	25-3

※（ ）内は残存高もしくは推定値。

表2-03 平地高森城跡 金属製品・鉄関連遺物一覧表

番号	出土位置			遺物内容		寸法				特徴	挿図 番号	図版 番号
	郭	トレンチ	層位 遺構	種別	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)			
M01	郭Ⅴ	5	SP02	鉄滓	—	34	32.5	19.5	28.6	椀形滓の一部。	2-21	25-4

4. まとめ

今回は、肱川の支流沿いにある中世城館跡2件の調査成果を報告した。河辺川沿いの堀城跡、沼田川(久米川)沿いの平地高森城跡のいずれも、文献に記載され、地域の象徴として歴史的に重要な城館跡である。しかしながら、これまで縄張図作成以外に文化財的な調査は実施されておらず、今回が初の詳細調査となった。

堀城跡は、近世以降に編纂された地誌に、敗走した大野直之の最期の地として紹介される城である。今回の調査では、後世に春日神社が造営された影響の大きいことが判明し、残念ながら成果は少なかった。ただし、点数は少ないが、16世紀後半の青花片、16世紀とみられる青磁片が出土していることから、文献史料に記される時期とおおむね重なることが明らかとなった。また、『大洲舊記』によれば、堀城は橘城の城主であった大野直範の支配下とされ、また、橘城に近い笹の森城も、大野氏が橘城へ移転する前の拠点であったことが記されている。ここで、それぞれの城の構造について注目したい。いずれの城も、比較的小さな主郭に(堀城跡および橘城跡は現存しないが)土塁が築かれ、その背後に広めの曲輪が続くという構造で共通している。このことから、文献上の記録だけではなく、城の構造という視点からも、この一帯が同一の勢力によって支配されていたことが明らかになってきた。

平地高森城跡は、当初から詰の城としての機能を期待して主郭(郭Ⅰ)から郭Ⅴまでが築かれたのち、永禄11(1568)年の鳥坂合戦以降に北側の郭群(郭Ⅵ、Ⅶ)が増築されたと推測した。一次史料である『柁谷家文書』には、元亀4(1573)年に、河野牛福(通直)から城主の梶谷氏に対して、高森城の「取捨」に対する宛行状が発出されているが、この「取捨」が「築城」を意味するのであれば、高森城は元亀4(1573)年ごろに築城されたと捉えることができ、「改修」を意味するのであれば、郭Ⅵ、Ⅶとその周辺の堅堀などの整備がこの頃になる可

能性がある。

その後、高森城は長宗我部氏の後ろ盾を得た大野直之に落とされたと伝わるが(『宇和舊記』)、天正6(1578)年ごろと思われる河野通直の感状が残されているように、梶谷氏が高森城を奪還している。天正7(1579)年にも、梶谷氏は敵対勢力から高森城を死守したとみられ、高森城は幾度も実戦を経験することになる。これに前後する天正5(1577)、6(1578)年ごろには、長宗我部氏と対立し追われる身となった一条兼定が梶谷氏によって匿われていたようであり、大野直之らが頻繁に高森城へ侵攻した理由のひとつとして、こうした事情もあったのかもしれない。

いずれにせよ、一次史料から城館や城館を中心とした周辺の状況について検討できる例は、大洲市内では稀有である。伊予と土佐、あるいは、各地の領主間で衝突が頻発した大洲地域において、平地高森城跡は、当時の情勢に迫ることのできる重要な事例といえる。

また、遺物の出土点数はわずかであったものの、一次史料と出土陶磁器の示す年代に齟齬はなく、また、土師質土器を検出できなかったことは、城が居住や饗応の空間ではなく、実戦の空間であったことを強調させる。

以上のように、堀城跡、平地高森城跡のいずれも、各地域の歴史を語るうえで重要であり、文献史料の記述と考古学的調査成果とが符合するような結果も得ることができた。

また、両城跡とも大野直之が関係するものの、大野直之そのものは一次史料にほとんど表れないため、現在にいたるまで実態は判然としていない。ただし、戦国期における大洲地域の支配構造の変遷や、伊予と土佐の境界地域を考察するうえで欠かせない人物であることは言を俟たず、今後は考古学的な成果からもアプローチできることを期待したい。(蔵本)

【参考文献】

- 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類の年代」
『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会
- 愛媛県教育委員会文化振興局 編 1987『愛媛県中世城館
跡分布調査報告書』、愛媛県教育委員会
- 藏本 諭・日和佐宣正 2022『大洲市内遺跡調査報告書Ⅰ
―旧街道・中世城館跡の調査―』大洲市埋蔵文化財調
査報告書第4集、大洲市教育委員会
- 瀬戸哲也 2015「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁につい
て」『貿易陶磁研究』No.35、日本貿易陶磁研究会
- 曾我満子 編 2024『企画展 西南四国の中世社会と公
家』、高知県立歴史民俗資料館(公益財団法人高知県
文化財団)
- 土居聡朋 2000「柁谷家文書解題」『武家文書目録』愛媛県
歴史文化博物館資料目録第27集、愛媛県歴史文化博
物館
- 乗岡 実 2017「戦国時代の備前焼編年」『東洋陶磁』第46
号、東洋陶磁学会
- 日和佐宣正 2019「伊予国宇和郡鳥坂城について ―戦
国期伊予国最大の合戦鳥坂合戦のターニングポイン
ト―」『戦乱の空間』第18号、戦乱の空間編集会
- 宮尾克彦 2007「平地高森城・花瀬城・瀧ノ城・鶴ヶ森城」
『温古』復刊第29号、大洲史談会
- 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易
陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会
- 山内治朋・石岡ひとみ 2007『平成19年度企画展 戦国南
予風雲録 乱世を語る南予の名品』、愛媛県歴史文化
博物館

图 版



1. 堀城跡 郭Ⅱ (北東から)



2. 堀城跡 郭Ⅱ (北から)



1. 堀城跡 郭Ⅱ 1トレンチ完掘状況(東から)



2. 堀城跡 郭Ⅱ 1トレンチ南壁土層(北東から)



1. 堀城跡 郭II 2 トレンチ完掘状況(北東から)



2. 堀城跡 郭II 2 トレンチ完掘状況(西から)



1. 堀城跡 郭Ⅱ 2トレンチ南壁土層(北東から)



2. 堀城跡 郭Ⅱ 2トレンチ SP01断面(南西から)



3. 堀城跡 郭Ⅱ 2トレンチ SP02断面(南西から)



1. 堀城跡 3 トレンチ南壁土層(北西から)



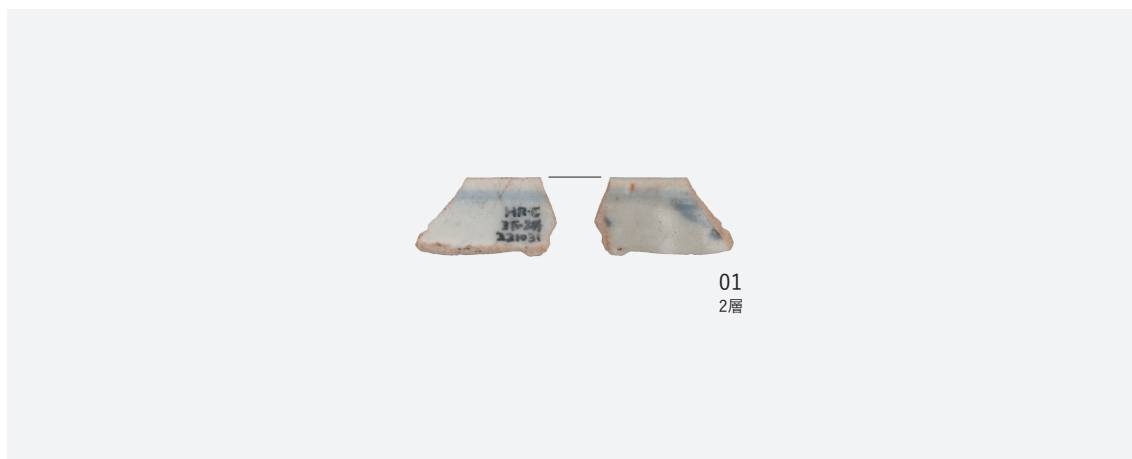
2. 堀城跡 3 トレンチ完掘状況(北から)



1. 堀城跡 4 トレンチ完掘状況(東から)



2. 堀城跡 4 トレンチ北壁土層(南東から)



01
2層

1. 堀城跡 3トレンチ出土遺物



02
1層

03
5層

04
5層

2. 堀城跡 4トレンチ出土遺物



1. 平地高森城跡 俯瞰(北東上空から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1トレンチ完掘状況(北東から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ完掘状況(北から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ完掘状況(北西から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1トレンチ(南)西壁土層(東から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1トレンチ(中央)西壁土層(東から)



3. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1トレンチ(北)西壁土層(東から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SK断面(東から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP01断面(東から)



3. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP02断面(南から)



4. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP03断面(東から)



5. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP04断面(西から)



6. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP05断面(北東から)



7. 平地高森城跡 郭Ⅰ 1 トレンチ SP06断面(東から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 2トレンチ完掘状況(北西から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 2トレンチ(北)東壁土層(西から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 2トレンチ(南)東壁土層(西から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 2トレンチ(南)東壁土層(北西から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3トレンチ完掘状況(西から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3トレンチ①(南)東壁土層(北西から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3トレンチ②(北)礫検出状況(南西から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3トレンチ①(北)東壁土層(西から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3トレンチ①(北)東壁・南壁土層(北西から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3トレンチ②石積裏込検出状況(北西から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3トレンチ②石積裏込検出状況(西から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅰ 3トレンチ②東壁土層(北から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 石積(東から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅰ 切岸(北西から)



1. 平地高森城跡 堀切 1 4 トレンチ完掘状況(北西から)



2. 平地高森城跡 堀切 1 4 トレンチ①東壁土層(西から)



1. 平地高森城跡 堀切1 4トレンチ②東壁土層(北西から)



2. 平地高森城跡 郭VII 石積(南東から)



1. 平地高森城跡 堀切2(南西から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅴ 切岸(西から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ完掘状況(南西から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ完掘状況(南から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5トレンチ完掘状況(南東から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5トレンチ東壁(南西から)



1. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP01断面(北東から)



2. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP02鉄滓出土状況
(南西から)



3. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP02断面(北東から)



4. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP03断面(北東から)



5. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP04断面(北東から)



6. 平地高森城跡 郭Ⅴ 5 トレンチ SP05,06断面
(北東から)



1. 平地高森城跡 1 トレンチ出土遺物



2. 平地高森城跡 3 トレンチ出土遺物



3. 平地高森城跡 郭 I 表面採集遺物



4. 平地高森城跡 5 トレンチ出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおずしないいせきちょうさほうこくしょさん
書 名	大洲市内遺跡調査報告書Ⅲ
副 書 名	中世城館跡の調査 2
シ リ ーズ 名	大洲市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 6 集
編 著 者 名	藏本 諭(編)・日和佐宣正
編 集 機 関	大洲市教育委員会
所 在 地	〒795-8601 愛媛県大洲市大洲690番地 1 電話:0893-57-9993
発 行 年 月 日	令和 7 (2025)年 3 月31日

ふ り が な 所 収 遺 跡	ふ り が な 所 在 地	自治体 コード	遺跡 番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
ほりじょうせき 堀城跡	えひめけんおおず し ひじかわちう 愛媛県大洲市肱川町 やま と きか 山鳥坂4285, 4284-1	382078	120	33°29'08.28"	132°43'30.05"	20221019～ 20221108	27.6㎡	範囲確認調査
ひら じ たかもりじょうせき 平地高森城跡	えひめけんおおず し ひらの ちう 愛媛県大洲市平野町 ひら じ 平地乙2041-1, 乙2029, 乙2027	382078	038	33°30'13.93"	132°30'32.33"	20231102～ 20240328	31.4㎡	範囲確認調査

ふ り が な 所 収 遺 跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ほりじょうせき 堀城跡	城館跡	中世	柱穴	陶磁器、土師質土器(皿)	
ひら じ たかもりじょうせき 平地高森城跡	城館跡	中世	堀切、竪堀、石積、柱穴	陶磁器、鉄滓	

大洲市埋蔵文化財調査報告書 第6集

大洲市内遺跡調査報告書Ⅲ

— 中世城館跡の調査 2 —

令和7(2025)年3月31日

編集・発行 大洲市教育委員会
〒795-8601 愛媛県大洲市大洲690番地1
電話:0893-57-9993

印刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 愛媛県湊町七丁目1番地8
電話:089-941-9111